

紹介でありませう。先生は長英の奇才を愛して之を友信君に推薦し月俸を供しましたのは前にも云つた通りです。此やうにして、先生は長英を初め春山などと往來し、此等の人々に地志歴史類の蘭書を讀ませ、其譯するまに之を筆記されました。そこで長英等が譯する難解の意味も、先生が記述すると意義が通じて善く要領を得ると云ふ有様でした。つまり先生は蘭書を讀まなかつたが、既に立派な蘭學者だつたのであります。

そこで此山の手派は一社を結びまして、名を尙齒會とつけました。齒は年齢の齡と同じで、尙齒會と云ふと高齢の老人達が集ると云ふ意味なのですが、之は幕府の嫌疑を憚つての稱號に過ぎません。此會は天保九年十月十五日始めて開かれたのであります。紀藩の儒官遠藤勝助を初め、經世の實學に志ある諸藩の志士の此會に加はるものも少

くありませんでした。西學を講じ、經世濟民の術を研究し、相互の智識を交換するのが、此會の目的であります。そこで諸藩の施政に就いて肝要なる問題で判断に苦むやうなことは、其藩士の會員から之を尙齒會に提出すると、此で討議して之に答へると云ふ風に、民間設立の政治顧問會のやうでありました。名望のある、人格の高い、識見の邁れた先生は、自づと此會の牛耳を執つて、隱然動かすべからざる勢力があつたのであります。

伊豆^に斐^に山の代官で、見識があり、氣節があつて、愛國家であつた、江川太郎左衛門英龍も、此頃には、先生の人物を慕つて交りを結んだのであります。英龍は坦庵と號して、しつかりした幕末の一人物で、畫も描くと云ふやうな趣味もあつた人であります。反射爐を斐山にこしらへて大砲を作り、海防のことには頗る熱心な先覺者でありました。華山先

生の高名を聞いて交りを結ばんとして、再度までも手紙を先生の所へ送られました。これに對して先生は返事を出して居られますが、多分之は天保八年のことであらうと思はれます。

再度御直書頂戴仕、難有仕合奉存候。先以霜寒生、威益御機嫌能被遊御座奉恐悅候。然は此度、不圖蒙御下交、殊厚拜御沙汰、恐懼の至奉存候。抑御英明の御風度被爲入候事は、細々傳聞仕、竊奉景望候處、何幸か得接紫眉難有仕合、第一に先奉拜謝候。私事老祖母は、九十六歳に死去、亡父は二十年の大病にて死去、弟八人當時存生罷在候。母一人にて、上は祖母病父に事へ、下私共八人の養育仕候へば、貧苦徹骨の中にて生長仕、八歳より日勤の奉公仕候間、朝夕僅なる暇にて畫を學び初午燈籠、或は繪馬の類を認め候て、右貧を助くるのみを心と致候。其志より終に風流韻事面白く相成、追々士大夫にも相交、漸士たる者

は如此義と發明仕候頃は、早や初老近く相成、終に一箇の畫師の如く相成候。尤主人より祿を賜候事も不薄、又亡父の教も嚴敷候へ共、何を申も病身にて、私早々奉公を致、重るに私は孱弱にて、此アラコシに相成候。

偕風流韻事の風、唯淫盜の媒に相成のみにて、實は是もあき果候へ共、年來此事にのみ心を委候間、今更捨難く、優游委蛇仕候故、英烈の御風度を奉拜候へば、唯何となく御敬慕申上、何卒折々は、御雄談も相伺度候。然るに却て分外の御沙汰、御至遜の御意を頂戴仕、何共恐怖至極仕候。是迄誰にも私從來の事を愁訴仕候事は、無之候へ共、已來厚御教誨を奉願度、不用僞飾、此段申上候。後來誤て御下交被下置とも御悔の時、挽回難仕候間、第一に此段申上候。

御國産山葵頂戴難有奉拜謝候。殊に名品絶味澤山にて、友人共へも

相分申候。

一五八

—— 渡 邊 華 山 ——

一、一昨日異國船印の譜拜借、難有仕合候。早々彼是引合候處、大抵は符合仕候。中には發明致し候事も有、御庇蔭の程難有仕合候。

一、房州風聞口間村土人漁獵に出候處、例のアメリカ船の内に大監罷在候旨風聞致候。尤無所謂好奇の評説には候へ共、渡邊公平と申書生當時聖堂の塾に在其地に遊び的聞致候旨、狩野宗得と申畫師傳聞、それより佐藤元晦と申醫人承候より咄に承候間、甚敷評説と存候へ共、難聞捨早々探聞仕候へども、未相分不申候。愈御聞及も被爲入事哉、實否相窺度候。

一、近頃地方大成と申刻本有之候。これは寫本の大成錄或は其他水利書一二拔萃致、著録候ものに候處、其誤を糺し申さんが爲、友人奥村と申もの瑣々たる小著仕候、則拜呈仕候。猶御評論相窺

ため如此候。此它種々申上度事候へ共、多事早々申殘候。此故宜敷被仰上可被下恐惶拜言。

十月廿九日

渡邊登百拜

江川太郎左衛門様

御家來中様

—— 尚 齒 會 ——

先生が自己の經歷を赤裸々に告白して、江川坦庵の交を索むるに答へられたは、定めし傑物坦庵も嘆賞したことでありませう。坦庵は先生の人格を敬愛して、頻に交らんことを求めたのでありますが、先生も己を虚うして交を結ぼうとする坦庵に對しては、頗る知己の感があつたのであります。先生も坦庵を稱して、寛永以上の人物と云つて居られます。しかし先生が後年の奇禍は焉んぞ知らん、此から胚胎してゐますことを。まことに神ならぬ身の知る由もなしであります。

一五九

之から坦庵と先生とは餘程親しくなりました、坦庵からは先生にいろくくの事を尋ねに来て、頗る益を得たやうであります。先生の方から云へば、當時勢力のあつた江川に意見を提供して之を動かすと云ふことは實際の力となりますから、憂國者と憂國者、先覺者と先覺者とは互に意氣相許したところがあつたのであります。先生の起艸せられました西洋事情御答書(缺舌小記)は、天保九年、先生が坦庵の間に答へられたものであります。

山

西洋事情御答書

西洋事情之儀蒙御尋奉畏候。不案内のことには候へども、想像仕候丈を申上候。

大凡人の安する所、其知ると不知とに係り、井蛙管見、固より論ずるに足らず候。

會 齒 尚

又高明尚古の者は蟹眼の天に向ひ燈臺の本暗きが如く、究竟するに盲目の蛇を惶れず、聾者の雷を避ざるに歸し可申、又島人の賊を思へず、田舎人の火を龜末に住るも亦懲ざるにて候べし。風腥して虎の在るを知り、雉啼て震の來るを知る。西洋諸蕃の事情を知るは、誠に今日の急務と奉存候。大凡の所一打に認め候へども、委細の事は筆紙に難盡候。

一、西洋諸蕃の儀、一地球に拘り候間、只歐羅巴計にては難申盡候に付、大凡を可申。

一地球の中赤道の南緯下の諸地は恐るゝに足らず候。唯北緯中三帶、一は熱帶、一は正帶、一は寒帶、此帶下の諸國氣候地味一ならず、山海により、沙漠により、氣候も違ひ、人物の多寡も違ひ、又其國の政度にて氣候迄もずつと違ひ、其上英出の者忽生出し候得ば、又天地の化育も

變じ、又政度より傑出の者を醸し出し、誠に千變萬化、一概に論じ難く候へども、必竟する所は、南地の者文華有之、北地の者は武術有之、回線規下の者は優游し、寒帯規下の者は困勉致し、中庸の所謂南方の強、北方の強の如く御座候。先は天地四方を辨じ候へば、其事情大抵は相分り可申候。

一、地球大別致し、五大洲と申せども、其實歐羅巴、亞細亞一洲、亞弗利加一洲、亞米利加一洲、三大洲にて、亞烏斯答邏利は其間の島地にて御座候。此三大洲の中、亞細亞歐羅巴の一洲中央に位し、人物政度尤生靈の長に御座候。人道は亞細亞南方に群出し、洋人のヨードン宗、今のイルサレムの地へイデン(今の印度)キリスト宗、今のナトリヤの地皆亞細亞二三十度以南の地に興り、唯孔子計りは卅五度以南の地に興り、太古の世は徳を推て君と相成候へ共、數世を経て武術の世と相成候

—— 山 華 邊 渡 ——

會 齒 尙

事、我朝唐山に相變る事無之候。其比は歐羅巴諸洲の食肉表皮の徒は蝦夷の如き蠢愚の民にて御座候。然るにヨードン宗、キリスト宗、追々北漸致し、東邏摩とて皆歐羅巴諸國の君柄を執り、人道最嚴盛に御座候。以後又ギリシヤの世と相成、且其千數年後、今の各國瓜分の世と相成、何の事も無之、三代より春秋の世の如く御座候。然るに歐羅巴よりも領北なる韃靼の諸地は、亞細亞歐羅巴の中央にありて、人物も亦早く隆生致し、又早く移り候へ共、深山幽澤の地にて、水草を逐て移る民俗故、壯勇他邦に勝れ、東部の民は唐山を併せ、西部の民はアラビヤ、ナトリヤ、歐羅巴、ギリシヤを併せ、ニラフル(大莫兒)ともモンゴルとも稱す。即ち元の子孫より申傳り、即古モンゴルは蒙古にて御座候。右の通北狄強民の世と相成候處、近來又北狄なる魯西亞國は尤傑出の國にて、ペートルと申英主忽然相起り、一代の内、西は蘇西

齊亞の一部、東は我邦の蝦夷界其里數大凡七千里一舉に併吞仕、世界第一の大國と相成り、伯德爾ベドールの世より今世迄二百年に不足所、政教文物最盛に御座候。年々右之通の次第に付、歐羅巴諸洲は八面敵と仕候間、中々唐山の如き疎大の治方にては一日も支兼候故、其政度、風俗、唯憂勤謹慎仕候、熟々と相考候へば、實に天地古今の一變に御座候。一、然れども物極れば衰へ、衰極まれば興る。天道自然、斡旋致し、文化年間、拂郎察國と獨逸國と親固の國に候へ共、虚に乗じ、獨逸國と戰爭相成候處、ボナバルテと申者、鄙賤より拂郎察國王と相成り、殊に獨逸、意大利亞、和蘭、ポーレンの諸國を打從へ、勢に乗じ、一世界を併吞仕度大志を發し、西洋諸國を打平げ候上にて、亞細亞迄も兵を加へんと仕候處、魯西亞と一戰に打負、終に今の靜謐と相成候。此より盟約益重く相成候上、猶更英主を慕ひ候、風俗相見候。

——山 華 邊 渡——

——會 齒 尚——

一、右の通政教盛なりし亞刺比亞、キリスト降誕の地なりしナトリヤ古教政盛なりし厄入多の三國は、度爾格に併せられ、佛道盛なりし印度は、今英吉利、拂朗西、波爾度ポルトガ、瓦爾ル、和蘭等の地と相成り、大莫臥兒は唐山界の方の小國と相成、孔子生國の唐山は滿洲に併せられ、一世界中古へ教政盛なりしは、一國も不殘夷狄の地と相成、古今文武の變も亦見るに足候事にて候。西洋教政盛なることは教主は、天子と位を同くし、生殺の權皆教主に有之候事、一人一身の行狀可否皆教主の任に御座候。依之天子といへ共、天子たる行爲を失ひ候へば、教主より相正し、其命に背候事不相成様に仕候由、國王は政事の主なる故、與奪の權を取、盟約を相守申候事にて申さば、天子と申役人の如くに御座候。身を治め人を治るを第一の任と仕候故、開才造士を專と仕、學校の盛なる事、我國唐山の及ぶ所に無御座候。教學、政學、醫學、物學を四學と

稱し、其餘は藝術と申候。學校術學の外、女學院、貧子院、病院、すべて造士の道、恐らくは唐山に相勝り申候。和蘭小國といへども、窮理一學校に三千八百人有之候、之にて推計候へば、教學政學などは猶更の事と存候。藝術に長じ候は、英吉利第一の由。

—— 渡 邊 華 山 ——

一、右の通造士の道盛にて、僅に和蘭の書に散見仕候もの、誠に大凡を擧げ認候。其中教書の類は御制禁故更に無之候。唯物理學の書のみ相渡し候。其物理の精明確實なる事は申迄も無之、其上大かた教政、醫を補ひ候事にて、第一天文、地理、物産等以下諸術の元を開き、藝術も亦上の四學を補ひ申候。如此互に相資け、年々歳々に造士の道盛に相成候。唐土などの文弊は更にこれなく候。

一、右の通學術實踐を以て天地四方を審に致し、人を育し、國を廣め候間、今は地球中一も歐羅巴諸國の有にて無きは無御座候。五大洲の中

—— 尚 齒 會 ——

亞細亞の外四洲大抵は西洋人の領地に相成候。其亞細亞の内とて、唐山は魯西亞とキヤクタ地方にて交販致し候上に、北京の學校へ兩人づゝ留學に參り居候。此儀は洋書のみにあらず、似指伊犁總統事略新斗總斗統經略三朝實錄にも油炭を賜はり候事相見へ候。清會典にも有之かと存候。夫は順治よりの事かと覺候、廣東澳門にはホルトガルの船八艘、アメリカ船三十艘、英吉利八十艘、交販有之、澳門には二萬テールを出し地を借し申候。尤ホルトガルの貴官の者總統致し候由、地理志に相見、經世文編にも汎然と申及候論相見へ候。其の外百爾西亞、亞刺比亞等尤盛、其餘印度蘇麻答刺、マロコ、榜葛刺、暹羅、占城、呂宋、渤泥、新和蘭、咬喝吧、食力別斯、千百の地日本海邊のマリアネ、ヒリピスの諸島、西洋人の領地に無之は無之候。唯其國を古來より不失ものは百爾西亞と我國のみに御座候。存出し候得ば、誠に心

細き事に御座候。然るに不知者は井蛙も安じ、鶻鷁も一枝を頼候心持に御座候。

一、知れば則牖戸を綯繆せざる可からず。凡我國に涎を流し候は、魯西亞、英吉利の二國の内、魯西亞は唐山に心ある事、モール陳情表、其外洋人の話往々有之。我國は唐山の心腹にて唇亡び齒寒き事、英吉利深く存候事故、魯西亞の我に事あるは英吉利の急に御座候。英吉利の急は魯西亞の急に御座候。唯我に周旋致し候者和蘭人にて、後來の勢豫て申上兼候。

一、然る上は古來唐山禦戎の論、我邦神風も頼べからざれば、先敵情を審に仕るより先なるは無之候。英吉利の大凡別帳の趣、魯西亞の大凡は譯書も多く有之候へば別に不申上候。右の外魯西亞と英吉利と區畫の違ひ候は、魯西亞は仁義を專と致し、地續きの國を廣め、段々に

相掛り、兎角極寒不毛の地を相望、次第に南に移ることを專と致候。英吉利は智略を專とし、航海を頼み、海外諸地を略し、兎角魯西亞の先を潜り候様の振舞多く御座候。二國共土地を拓き候事、拔群に候て、已に北亞墨利加フルエーニクテスターテなどは方積十一萬二千四百六十六マイル、大凡今の唐山西域を一所に仕候程の大國にて大凡二百年來心掛、民を移候。

尤拂郎察、和蘭なども同相開候へ共、七分は英吉利に御座候。寛政の頃より尤盛にして、僅に五十年の間に天下第一の富國と仕候程の手際、又此新和蘭を開拓し、新ワルレスと申我國より二倍程の場所を先政度を相立候、押付全島に及候へば、歐羅巴洲程の大洲に相成候。右之通土地を開拓候事は尤妙を得、各々人の國を奪ひ候事尤妙に御座候。已に印度と申は釋迦降誕の國にて古來より政度文物盛なる所、

莫臥兒領と相成候へども、固蒙古人の事故、船の事に暗く、海防不行届候間、始は地を借、交販致候へ共終にイギリスに十の五分を失ひ、フランス、ホルトガルに十の二分を失ひ候。且又年數を考へ候へば、文化中ボナバルテの變より、増々強大に相成候。其他アメリカのカナダ諸地、アフリカ諸地、筆紙に難盡候。右の通天地を一觀致し、表に同仁の惠恩を稱し、漫に兵力を不加、夷狄抔と輕じ候事は、誠に盲人の相象にて御座候。

一、凡右事變に従ひ政を立候儀は古今の通儀に御座候。天地古今變ぜざれば不止、太古の世は日本僅に大八洲に限り、奥州は未開候處、追々地方を辨へ、熊襲征伐の後、皇后自ら新羅を征し、其後越の津輕の地、陸奥地、次第に相開き、終に後世松前蝦夷に及、皆大抵事生じ、憂勤の所及、威力共に舉り、終に太閤の征戰と相成候。中葉耶蘇の邪教に懲り、規

模狭小と相成、唯一國を治る意なる故、終に海外の侮りを受候にて、已後の變如何を不存候。是は如何にと云に昔一室を治候者、志僅に鐘釜妻妾有之に、偶大盜至れば門を堅め、牆を高うして内妻妾に驕る、大盜壓來候共、門牆は越ざれども、一村焼打候て、終に延焼に及候、所謂莊子の譬の如く御座候。抑西洋の可恐は雷を聞て耳を塞ぎ、電を忌で目を塞ぎ候事を第一の惡と仕候。唯萬物計窮理仕候には無之、萬事議論皆理を窮るを專務と仕候。日本地誌の名を承候分左の通、ヤンホイケンス、リンコーテン、モンタニユス、(船來あり)トインベルグ、メイラン、(風土記)船來あり、其他シーボルト人種考、同產物考等はもはや開板と相成候。

此節「ベルグステイン」なるもの日本志に相掛り、其内草稿最早相濟申候。其他紀行類舉て難數御成候。

一、シーボルトは日本より歸國後、自然窮理學頭と相成、直に魯西亞に参り、一旦和蘭へ歸候へ共、日本功者の由にて、魯西亞の學頭に被_レ乞_レ近き内に引移候よし。

一、兵の義は陸軍海軍と相分り、英吉利は別帳の趣、大抵人別五十分の一、或は百分の一にて、フランスのナポレオンの時、陸軍六十五萬人、リテシケーペン(船の名)七十四、フレガッテン^上同六十、コルベテン^上同二十九、ブリツキシケーペン^上同二十二、コルベツテン、ブリツキシケーペン、ブリコイトシケーペン合二十六、ガハルレン常に軍粧致し、兵二萬五千九百人、大煩二千八百七十座を備、海岸を相固申候。其餘の艦は空船に致し、急に備る様に致置候由、右の通武士の番は皆武粧にて、非常の備御奉公のみにて、常に事を兼勤ると申事無之、江戸の火消役の如くに御座候。依之政所、教堂、學校等に夥敷人數入候事、故國王出行の供

立は至て手輕にて已に五六年以前謀反人有之時、天子の供は僅に二十五人にて候。魯西亞にても共通と相見え、環海異聞に執政の供僅に五六人の由証し有之蘭人申候。ゼネラルは本土を離れ候地故、供多數連候とて僅に十五人にて候よし、右之通質素に仕候は、皆人才を育し學問を專に、實用專一に仕候故の事と相聞候。英吉利、魯西亞なども右に准じ候事と被_レ存候へば、中々十年二十年事無之共、永世の策無之候ては、亞細亞諸國は一日も安じ不申候。

一、ニーマンと申近來參候甲比丹咄にては、英吉利海禦の嚴なる事、世界中の敵を一時に受候ても、逆も攻る事不能由推察に御座候。是皆軍船の備有之を申にて候。

一、ニーマンの逼留中、オルフと申蘭人の申候は、イギリス日本地方の島々を取候間御用心可被_レ成、何れにも火術鍛練ならざれば防ぎは出來

不申候。金二百兩づつ年々被下候は、火術に功者なるものを選び、五六年も留越御教示申度と申けるよし。

一、西洋諸國無名の軍は興し不申候間、何れにも名を正する事を始と致し候。ポナバルテ厄入多を征し候時も、渡海の妨と、舊年の恨と、不義の事と數件の譯を申立致し候。

一、西洋諸國は全地球中の權を持し候。已に和蘭をポナバルテ奪取候時、世界中の和蘭交易を留和蘭の船旗を奪ひ申候。其比ドウフと申甲比丹、長崎に勤番中の事にて、瓜哇コンバクニートの旗を出島へ隠し置候由、洋書には唯日本交易の旗のみは差許すと相見候得共、多くは、崎陽へ隠候故、難取揚事も有之と被存候。其比は異體の蘭人も參候由、崎人の咄にて候。

一、右の通權地球に及候洋人は、實に大敵と申も餘り有之候事にて、何卒

渡 邊 華 山

此上は御政廳の御規模の廣大を祈る所也。

先生と江川坦庵との交際は實に晩年であります。先生が入獄後の書面にも「唯江印(江川)交一兩年也」とありますが如く、月日は極淺うございましたが、先生は坦庵を「忠膽無二」と評し、「直截なる御人」と稱して、尊敬して、其尋ね求むる所は直に喜んで答へて居られます。坦庵は先生の人物學識に非常の敬意を表して、寧ろ師禮を以て遇してゐたのであります。しかし此偉大なる二人物が相結托するのは、小人共には安からぬとであるに相違ありません。兩者の間が濃密になればなる程、猜忌讒間は其間に進入して來るのであります。先生と坦庵との交際は公けの爲からであります。國家の爲めからであります。憂國の至情からであります。理想の爲め、主義の爲めからであります。しかし猜忌讒間するものは、陋劣なる私情から起つて來るのであります。私利私

會 齒 尚

慾の爲めからであります。そこに大人と小人との區別、正士と奸邪との差別があります。大人正士の公明な心事は無論、小人奸邪に分るものではありません。

奥平弘平を坦庵に紹介したり、又坦庵から浦賀測量師傭聘の依頼がありましたから、奥村喜三郎、内田彌太郎を推薦したり、三宅三郎を齋藤彌九郎に依頼して坦庵へ紹介したりして、先生と江川坦庵との間は肝膽相照らす有様でありました。

對外關係が多事となるとともに先生の活動も盛になりました。もう先生は田原の家老として居るべき場合ではありません、天下の處士となつて天下の爲に働かねばなりません。先生は退役願を出して其素志を貫徹されやうとしましたが、藩侯は此賢相を手離すことを許されません。先生の雄心は勃々として尙齒會の設立となり、事實

—— 山 華 邊 渡 ——

—— 會 齒 尙 ——

天下の政治に就いて横議する地位に立たれたのであります。先生が天下の重きを以て自ら任ずるとともに、自づと先生の身邊には危険がつきまつて來たのであります。先生の用意周到なる、之を豫知されないことはなかつたのであります。國家と云ふ大なるものゝ爲めに憂へては、小なる一身を顧慮する暇はなかつたのであります。

先生の逸事として、三宅友信君の先生略傳中に、

竹村悔藏は三河舉母内藤侯の臣佐藤一齋の高足弟子なり。性豪邁不羈、博學強記にして幼に神童の名あり。(十二歳の頃林祭酒に就て其詩賦を來幣の朝鮮人に示す、外人皆其高才を感歎することある等)内藤侯の邸は麴町我邸と相隣る。悔藏問あれば、必ず先生を來り訪ふ、或は一日數回に至るとあり、尤も親友也。竹村氏忽ち一日來り謂ふ、余藩の老臣執政津村佐次輔なる者專横驕恣、營私蔑公、吾爲君家に

大事を行はんと欲すと。先生其義憤を感じ、已に果斷の色を察し、賛成して俱に其志を云ふ。去る時邸門外に送り、深く永訣を惜悲の色あり。(僕時に幼年窓上より目撃)是夕竹村氏其本邸の外に津村氏を刺し、家に還て剖腹す。先生常に良友を喪ふの歎あり。然れども其義氣に於て苟も假さざる所ある斯くの如し。

と云ふ記事が見えてゐます。先生は渾身義憤の人でありました。其國家の爲に一身を犠牲にされたのは當然のことであります。

十三 人としての先生

先生の一生は殆ど勤勉で貫いてゐます。先生は夏の永い晝でも晝寝と云ふことをされたことがありません。ですから誰でも晝寝をするものがあると、之に訓戒を與へられました。平生どこへ行かれると

きでも、必ず懷に雁皮紙の小冊子を入れ、眼に入りて多少の参考となるものは必ず之を寫生されたものであります。其冊子は積んで累々たるものをなしたと云ふことです。又見ること聞くことを手に随つて記述されて置きました。客座録客坐掌記などと云ふのは即ち此類のものであります。どこかへ行けば必ず文と晝とより成る紀行を書かれました。目黒詣や墨堤行樂などは其の遺墨であります。藩老として藩の爲に盡されたことだけでも尋常人の企て及ぶ所ではありませぬ。西洋式兵學を採用したばかりでなく、田原藩で用ひてゐた擊劍の直眞流は型を主としたもので實用に遠いからとて神道無念流の劍客杉山大助や天下に名のある齋藤彌九郎を聘して、一藩の劍法を改められました。農政改良以外には大藏永常を聘して砂糖の製造を試みたり、櫛はせの培養をして蠟の製造を試みたり、博多人形の製造までも敢てし

たのでありました。又海苔・海藻・海鼠・蛸等の養殖をも奨励されたのであります。先生の記録中には海苔のことや農蠶のことが所々に出てゐます。其農事に注意されたことは、門田の榮にくはしく見えます。又一藩子弟の教育には頗る力を盡されまして、藩學の成章館を盛にし、出羽酒田の人で、嘗て朝川善庵の養子であつた儒者伊藤鳳山を聘して其教授としました。先生自ら孔子の像を畫きまして、當時の畫家に孔子の弟子十哲の像を畫かせ、十人の儒者に畫讃をさせて、之を成章館の中心として、人材養成に意を用ひられました。先生は自己の教育方針を藩學の師範方に示されましたが、其文章は次の如きものであります。

○ 師範方の義は、先其身より人に及し、候而、御教化を興し候基に付、其身持は勿論、子弟成器を相樂み、教方懇誠にして、條理有之様、心掛第一の事

—— 渡 邊 華 山 ——

—— 人 と し て の 先 生 ——

一、子弟成器の可否は、幼穉の節尤も大切の儀に付、誤讀誤解無之、行儀作法迄行届候様、嚴敷可申付候事。

○ 一、近世學問の儀、大抵訓詁詩文を精致候迄にて、所得を以て施行致候もの無之候間、實行第一に心掛る様、教導可有之、其内不忠不孝不弟の筋有之ば、猶更少しも用捨なく、督責可有之候事。

○ 一、實行は第一の事に候得共、學問不精候向は、施行も亦廣からずして、御用立不申候間、此御趣意を差含序を失ひ、本を忘れざる様に教諭可有之事。

一、才能の儀は、有用をむねと致可申、若又異才異能の者有之候而、實天稟にして、拔群の者は、大倫の外、小廉曲謹を以て、其才能を塞がざる様、寛養可致事。

一、今時文墨の弊淺からざるに付、一切封禁被成候得共、詞章の義も、其

所得の義は顯著にて、言語文字ならでは、御試被成がたく、又其旨差含可申、たとへ士氣鄙樸に流れ候も、浮靡なる義は、一切御趣意思召にも相振れ候間、屹度相心得可申、御家風に不合候事。

一、學程心得方の義は、師範方にて差定候通り皆相守候事。

出精の者御賞美可有之、聊たりとも式規則程則に背き候ものは屹度嚴敷御答可被仰付候間、兼而其旨深く相心得可申候。

右の條々師範の者掛りの者、子弟の者迄不洩様に可申進もの也。

學の用は行にあるから、先生は實行を奨励して居られます。しかし學と行と相並ばざれば、行も狭くなりますから、學問の勉勵をすゝめて居られるのであります。天才の發揮を妨げざるやうに教へよと警め詞章も決して棄つべからざるにつき、必ずしも之を排すべきものでないと誨へ、浮華を斥けて寧ろ鄙樸たれよと訓へ、賞罰を明にせよと命ぜ

られたのであります。學校教育の方針としては洵に遺憾のない趣旨であります。此成章館は文化七年田原藩士萱生玄順等が時の藩侯三宅康和君に建議して建てたものであります。先生の方に依りて隆盛になつたのであります。明治四年まで開板してゐましたが、廢藩置縣とともに廢校となりました。今日田原の尋常高等小學校の敷地内の一部分は此藩學のあつた處であります。

此外先生は家老として内政につとめ、又外間とも折衝なされ、江戸邸と藩地とにいろ／＼指圖をしたり計劃したりして居られます。其上先生の生命なる畫事の研究は廢されず、漢學は松崎慊堂に依りて猶磨いて居られます。又蘭學の勉強には一生懸命であります。或時友人の家を尋ねられましたところが、其家に舶來の地球圖がありましたから、先生は非常に面白く思はれまして、午前から日の暮れるまで食事を

も取らず茶も飲まずに之を視つめて居られましたと云ふことです。全く先生は勤勉な精勵の人であつたのです。しかも其勤勉其精勵は向上の一念からです。此勤勉此精勵は實に崇高なる人格者偉大なる活眼家の華山先生を作り上げたのであります。眞木重郎兵衛に與へた手紙の中にも、

邊 華 山

養才教化は武士の帶刀の如く心得たらば、御時節柄とて道と俗と別には不存、御家中一同佐野源左衛門の心得となるべし。其上子を思はぬ親はなく、君を思はぬ臣はなかるべし。教化次第にて人心其本に反り可申候。

と、養才教化の要を説き、又同じ書面の中に、伊藤鳳山を評して、

大三郎古書を読み、經を解く處、教に不倦所皆取るべく候。唯大疵と申は、道と行とを斷然と別に仕己に克つこと、毫分も出來不申、實に玉

人としての先生

盃の底なきが如くに御座候。教化は何分無覺東誠に可惜も無限候。私此地に移り候間、先快方次第意見可仕存候。

と、云つて居られます。先生は佐藤一齋の門人だけあつて、知行合一で、實行家でありました。師範方に身を以て模範たるべしと戒められたるは、先生に於て始めて云ひ得べしであります。

忠たり孝たる處は、先生に於いて殆ど間然する所がありません。今更先生の孝子たる例を出すにも及びますまいが、或時先生がさる骨董店で古い甲冑を見つけられました。古色蒼然として、碧血に染みたまのでありました。「いつ頃のものか」と尋ねると、「關ヶ原役のものだ」と云ふことで、先生は非常に悦ばれ、之を購はれまして、朝夕座右に置いて愛玩限りがなかつたのです。すると母堂はこれを見て、「こんな不潔な古戰場に曝らしたものを買つて來てどうするか、縁起でもないに」と散々

不興の體でありました。すると先生は直さま之を持ち出して賣り拂はれてしまいました。又或時某の大名から古墨を賜はりましたので先生は之を机上に置いて大切に居られました。すると九十餘歳になつてもうぼけた老祖母が或日それを見、「こんな炭切れを飾つて置くとは何事ぞや」と云つて、庭石の上で打破つて爐の中へ投げ込んでしまひました。先生は傍で見て居られましたが、あは、と笑つてばかり居て、少しも老祖母のぼけたのを咎められなかつたさうです。一體寛厚は先生の持前でありました。嘗て稻垣侯から依頼されて着色の牡丹の大幅を畫いて居られました。もう線描きは出來て居りました。ところが急に藩侯の用があるので、筆を措いて其方に往かれましたが、其時先生に従つて畫を學んでゐた友信君に牡丹枝葉の裏に白緑（びやうりく）を染めることを依頼して往かれたのです。すると友信君は間違つ

て花葩の裏に白緑を塗つてしまはれたのです。友信君之はしまつたりと大閉口の體であつたが、歸つて之を見た先生は少しも其過失を咎められず、にこ／＼として筆を執りながら其汚した所を潤色されました。又さる門人で、先生の家に寄寓してゐたものに大酒の癖のものが居ました。先生は平生之を戒めて居られましたが、持つた病で中々治りません。一夕非常に酩酊して歸つて來ましたが、生醉本性違はず、定めし先生に大目玉を頂戴するものと恐る／＼、先生の前に出て平伏して謝罪しましたところ、先生は微笑しながら、「おう唯今戻つたかい」と云はれたばかりで、ちつとも小言を云はれないので、其男はひどく恐縮して、之から大酒の癖がぼつたり罷んだと云ふことであります。先生が身を以て人を化されたのは概ね此類であります。

先生の寛厚なるは、即ち心に綽々たる餘裕があつたからであります。

—— 渡 邊 華 山 ——

勤勉精勵であつた先生は、又精神上に頗る悠々たる所があつたのであります。物に役せられずに心を超然たらしめられた所があつたのであります。一體先生は趣味の人でありました。又何をやつても器用な方でありました。又人情世態の機微に通曉された人でありました。本職の畫は姑く措き、詩もやれば、文にも長じ、歌・俳句も作れば狂歌も旨く、戯文にも得手でゐたのであります。詩文は處々に引用しましたから、今更此に記する必要もありません。歌・俳句・狂歌の二三づゝを擧げて、先生の趣味の多方面であつたことを示しませう。

月色照高低

くもりなき御世の恵みに海山も

くまなく照らす秋の夜の月

微月泛江上

—— 生 先 の て し と ——

蘆間もるかかりをそれと弓張の

月はるゝかたにかへる釣舟

夏の月駱駝の小屋のとれしあと

竹の根に水さら／＼と時雨れけり

吸ものゝ上を渡るや春の鐘

板の間の釘もひかるや夜の寒み

枯柳乞食のくさめ聞えけり

山邊赤人

馬鹿なやつ汐満ちくればあぶないに

蘆邊をさして網打ちわたる

ながらへば子にさへ馬鹿にさるゝ身は

うしと見し世ぞ今は戀しき

行先はまつ毛の如く近過ぎて

見ること出来ぬ地獄極樂

先生の手紙の中には少からぬ警句があるを、見ても、先生の機智に富んだことが分ります。又先生の著作中には酸いも旨いも噛み分けた大通のものもあります。先生は型にはまつた謹嚴一方の道學者でなくて、十分に人生を善く知りぬいた偉大なる人格者でありました。

或人、齊家の法を求む。先生乃ち守の説を書いておやりになりました。然るに漢文であるから、読み難いと云ふことです。又々之が俗解を書いて授けられました。

守

凡處富之道、難於處貧之道。夫人厚積則必有親戚之請求、貧窮之怨望、童僕之奸騙、大而盜賊之劫取、小而穿窬之鼠竊、徑商之虧折、行路之失脫、田

禾之災傷、攘奪之爭訟、子弟之浪費、種々之苦、貧者不知、唯厚富者兼有之。故爲其子孫者、受家之難倍於貧家、受家之難。況父祖創業之難、更倍於子孫受家之難。夫父祖儉於居身而裕於接物、概於取利而謹於蓋藏、旦夕戰々兢兢、履虎尾、涉春冰、能厚積於内而不取怨於外、身困道亨、終身如斯而難身死、豈帶斯財貨去哉。是非爲子孫計乎。其世々相繼不墮者、自家庭鄉黨、以至涉世應務之道、無不周備。許魯齋曰、學者以治世最爲先。司馬溫公每問士大夫生計之足否、士君子猶如斯、況農商乎。故能知創業之難、恪遵父祖之家訓、寧不昌大其門、必忽忘稼穡之辛難。寧有盤石之固、必勿安常而爲虛誇之風。寧不取功名於一鄉、必勿不積於其身。知懼鮮失。其斯在一守字乎。

隨安居士識

凡金を持たる家は貧乏人よりも恐れが多い處で、何の事もなく大き

な石をかついで居ると軽い燈心をがついで居るとの大義は相違あり。それ金を持たる家は必一家親族よりねダリ事多く、貧亡人でなければ金は借りぬ故こうもしそうはないあしも仕そうはないといろく内證で怨まれる事あり、又内の召仕どもに小取逃げ勝手をはたらき、大なる事はおしこみねだりの強盗あり、小にしては墻を越へヤジリをきり忍びくの火付ドロボウ鼠の様にうるさい事、又たび商人のかけ度々來からだしぬかれ知た顔故餘計にかせば、終に來ぬやうになり、にけり、又デッチを使ひにやれば歸りは案じ、自身に行ば夜道はこわい、虚にも金が散居るやうに思はるれば、何に付ても歩行を氣を付、雨が降ても風が吹ても、田畑はどうじや飢饉といえ、あれにもやらにやならぬ、これにも施しせにやならぬ、田畑の損の上の大損、ひよつと己が死ねば小供が家督を争ひ、遺物を争ひ、終には公事に

なる事が世には少き事にあらず、兄弟小共多ければ、女郎かひ酒のみ、賭奕の場、ろくな遊びせぬからに、藝能は金を遣ふばかり、種々なさつたの諸くるしみ、貧乏人には聞もせぬ、ただ富む人は此種々な苦界苦勞が皆あれば、そこで家督になる人は、こんは安樂仕合とひよつと思へば大間違ひ、貧家の家督が幾倍かこれより下になりやうがないと思へば、何しても損の仕様のない家と、富る家とは大違ひ、まだそれよりもちぢ様やこのと様は、其貧の内からかかる大富とならしやる事の骨折は、ぬれ手で泡の家督より、いくら苦勞が百倍かたとえにさへも言ひがたく、先に一寸いはふなら、其身を詰て貧家よりまづい食物を常にたべ、きたないものを常にきて、そこで家來や親類に極丁寧に厚くやり、村の貧家の質ぬしに、利足をむりに取あげず、ただ貯へを謹みて、ぬれてで泡を掴む事至而きらい、ただ微塵積りて山をなす事

を心にかける誠故、朝夕のつつしみは、猛き獸の尾をふめる、又春とける薄氷わたるやうにびく／＼と懼れつつしみ、それ故に内に厚く、金銀を山に積とも、人に損かけざる故に怨をば猶更受る氣遣ひはなきのみならず、恩澤を忘れぬ程に人したひ、これ餘の事でない其身くるしみ志^{とほ}亨道理でム升ス、さてそのやうに一生を困苦した上、死だ時骨折る金を持って行事は出来ねばする氣もなし、ただ子孫此心を繼でおとさず、家法なる一家和睦を第一に、其上一村助けすくひ、貧人あれば富人もある故、それを天道と思ひて、浮世相持の心を持って、職業を大事にするは有と無し互に融道をつけ合ふ道、すべての事を其家のおきてに法を立たるは殘がたなき善好人、むかし元朝許魯齋も、宋の大臣溫公も皆生業を第一とぞ申けるを考へば、士已上もその通、ましてや百姓商人は唯生業ぞ大事なる、そこで家督を取る人は其親貧の時に

してかゝる富家になりたるはなみ大ていの事でない、これをわすれず能家の親の耕作商賣より家の治め世の務、すべて其法立たれば少しも違はず守れかし、よしや其身に才のりて猶金持にならふよりわるく致せば鶴の真似の鳥の如く、山師して大損すれば、それよりは、先耕作や商賣のかばそい利徳積上な、よしや其家豪富でいくらの損を致しても大盤石の身代とたとへそふでも、常になれこの位なるおごりをばしてもよからふなどと他の花美の風俗ちりほども慎む事が第一ぞ、よしや村に近き遠き所に致せ、新田や水利や湊大山にかかれる人は、大功をあらはす事はもと人をすくふ心はよけれども、大功とりて、内證で不埒するより、其身分少しの徳もゆるがせに道踏ゆきて人の人たる道をそこなはぬやうにこころへたまへかし、懼れを知ればあやまちが少ないからに、その親のおきては厚守る字のたゞこの

一字こそ、一生の守りところはおもひたまへ。

守るの一字は人の人たる道を踏み損はぬにあることを懇々卑近な諭を以て説き明かされたのであります。一家和合し、其心を推し廣めて一郷一村に及ぼせよと説き聞かせられたのであります。華美を謹み、浮誇に流るゝこと勿れと戒められたのであります。委曲を盡して丁寧反復に深切を極めてゐます。之れ一家の守のみではありません。華一郷一村、猶大にして一國の人民が守るべき道であります。先生は實に此守の實行者でありました。其實行者が教へられたのでありますから、其教訓は生きて居ります。唯の理論ではなくて、實踐道德であります。金玉の教と云はねばなりません。古い教ではなくて、いつでも新しい教であります。先生自ら質素であつたことは、松崎慊堂が「衣服にも上着下着揃には一襲も無之」とあるが如く、又先生の好物は握飯の

つけ焼きであつたと云ふ如く、贅澤と云ふことは薬にしたくもありませんでした。

嘗て真木重郎兵衛が藩の用金調達のため、大阪に滞在してゐた時、八勿の訓戒を與へて、之を警められました。

- 一、面語の情に常を忘る勿れ。
- 一、眼前の繰廻しに百年の計を忘る勿れ。
- 一、前面の功を期して後面の費を忘る勿れ。
- 一、大功は緩にあり、機會は急にありといふことを忘る勿れ。
- 一、面は冷なるを欲し、背は暖を欲すると云ふを忘る勿れ。
- 一、舉動を慎み、其恒を見らるゝ勿れ。
- 一、人を欺かんとする者は事に欺むかる、不欺は即不欺己といふことを忘る勿れ。

一、基立て物従ふ、基は心の實といふを忘る勿れ。
 いづれも事を成すものに取りて緊要の條件であります。古聖賢の教へを集大成したものと云つてよろしうございます。拳々服膺していつたならば、事を成すに於て、必ず失敗はありません。眼前の小なるに即せずして、大本を立てよ、急いで事は仕損ずる。何と立派な格言で邊はありませんか。

又或商人が先生に何か書いて下さいと頼みましたところ、先生はよしくと早速承知されて書かれたは左の訓戒。

- 一、先づ朝は召使より早く起きよ。
- 二、十兩の客より百文の客を大切にせよ。
- 一、買人が氣に入らず、返しに來らば、賣る時より叮嚀にせよ。
- 一、繁昌するに従て益々儉約をせよ。

- 一、小使は一文よりしるせ。
 - 一、開店の時を忘るな。
 - 一、同商賣が近所に出來たら、懇意を厚くし、互に勵めよ。
 - 一、出店を開いたら三ヶ年は食料を送れ。
- 條々如何にも痛切に商人の心得を説いたもので商業道德の極致であります。

先生は身軀長く、偉丈夫でありました。嘗て劔客金子武四郎と一所に旅行をしたところが、いづれも堂々たる身の丈拔群の大男でありましたから、先生も劔客であらうと推察されたさうです。併し門人椿椿山が書いた先生の肖像を見ますと、如何にも寛厚の長者であることが其相好に現はれてゐます。意志の強い、凜たる節操を持たれたとともに、慈悲慈愛に富んで、胸中灑落に、綽々たる雅量を有した胸の廣い温厚

篤實なる君子人であつたのであります。蕭殺たる秋風の人でなくて、駘蕩たる春風の人であつたのであります。

十四 慎機論

渡 時勢は愈、切迫して來ました。沖々たる先生憂國の至情はもう坐視
 邊 することを許しませんでした。長崎にある和蘭の甲比丹より英國船
 華 渡來の風聞を幕府へ報告した時、先生は田原の國家老に警告して、
 山 右イギリ 國之義、日本交易を乞ひ候事は、必定に御座候得共、日本に
 て交易を御斷に相成候事も必定之段は、彼國に於ても兼々承知に御座
 候。然るに物入れをかけ參り候事、一通にては相濟不申。ロシヤ一
 件も委細に心得參り候事、其上此方にて御斷に相成候時は、其段は承
 知致、扱又國に於て我商船漂流之時、サツマ室島之一件、其外海岸にて

兵器を備、我船の難儀を救不被申、同く天を戴き、同敷地を踏、同じ人間
 にて、一國の故を以て天下の害を被成候節、天下の爲に無據兵器を相
 用可申候。此御答承り申度と申候時、如何御答有之哉、甚大變に及び
 可申候。

慎 と、憂慮し、それにつけても幕府の儉安たかみを笑ひ、
 機 右之通の世の中故、田原は武を講じ、徳を敷き、天地の間に獨立致、掌大
 の地を百世に存し候様、御工夫第一なり、何でも徳に無之ては危し。

論 と喝破され、諸侯の愚なるを嘲りて、
 かくの如き大馬鹿大名ばかり有之、さて、こまり入候もの也、家來
 も家來なり。

と痛嘆せられてゐます。天保九年三月、和蘭の甲比丹ニユイマンガ江
 戸に來ました時、先生は之を訪ひ、通辭を介して問答して筆記されまし

たものが即ち缺舌或問であります。

天保九年十月十五日の頃であります。高野長英門下内田彌太郎奥村喜三郎といふ幕士が、蘭書に依りて、西洋の航海學を研究しまして、經緯器と云ふ器械を發明し、船の漂蕩難破を防がうとの考で、尙齒會の例會日である、此月十日の會へ提出しました。又會員芳賀市三郎が上野下野甲斐信濃を歴遊して、其風土物産等のことを書き記し、之を會に提出して衆議に問ひました。此二議案が畢つて、會員も過半退散して、僅か十四五名となつた時に、評定所の記録方であつた芳賀市三郎は、内密に一事件を漏しました。それは和蘭甲比丹より英吉利のモリソン船が我が漂流民七名を護送して江戸近海に來航するの風聞を密告した、それに就いて閣老水野越前守忠邦は先年露國使節レザノフ來航の例に倣ひて應接する意であつたが、評定所に意見を尋ねたところが、文政

論 機 慎

打拂ひの令に従ひて擊攘すべき旨決定したとのであります。先生や長英等は、そりや由々しいことである、外船が漂流民を護送して來るのに、それを打拂とは何事ぞ、之れ怨を強國に構へて不測の禍を醸す所以である、殊にモリソンは船でなくて人の名で、之は稀世の豪傑である、憤慨憂慮に一同は時の經つのを忘れました。先生の缺舌或問にも、一、或問、諸厄利亞のモリソンはいかやうの人に候や。

答曰、モリソンは龍動の人にして、生得大志有之、奇功を建てん事を心がけ候て、兄弟共に廣東に至り、濠境に十六年間留學し、支那文に通じ、五車韻府を著はし、其外周易書經通鑑綱目東華錄西域碑文を翻譯し、支那志日本志蝦夷志をも著作仕候。但この三志未成らざるよしに候。

とありまして、先生や長英のやうな卓識家は此人に於て共通の點を認

め、平生少ならず敬慕の情を致してゐたのであります。ところが今其人がとにかく我が漂流民を送還し來るに、それを擊攘するとは、法外千萬のことに深く心痛されました。長英は夢物語を著し、先生は天保十年正月、匆忙筆を呵して慎機論を起艸されました。慎機論は一夜の中に成つたもので、未定のものではあるが時事に關して、先生の心血を瀝がされたものであります。先生と長英と、夢物語と慎機論とは、同心一體の華ものでありますから、長いのを厭はず、此に掲げます。

山
慎機論

我田原は、三州渥美郡に在て、遠州大洋中へ迸出し、荒井より伊良虞に至り海濱凡十三里の間、佃戸農家のみにして、我田原藩の外城地なければ、元文四年の令有りしよりは、海防の制尤嚴ならずんばある可からず。然れ共兵備は敵情を審にせざれば、策謀の由て生ずる所なき

を以て、地理制度・風俗・事實は勿論、里巷猥談・戲劇瑣屑の事、其浮説信すべからずと云へども、見聞の及ぶ所を記録し置かざるはなし。近くは好事浮躁の士、喋喋不息者、本年七月和蘭陀甲比丹祕奏せる事有り。英吉利斯國の人モリソンなる者、交易を乞はん爲め、我漂流民七人を護送して江戸近海に至ると聞く。按ずるにモリソンなる者は、英吉利斯龍動の人にして、唐山廣東の滯鏡澳の商館に留學すると凡十六年、頗る唐山の學に通じ、予が視る處、其の著述せるもの尤多し。五車韻府は三年の刻にして、周易通鑑綱目・東華錄・西域碑文・地理志の類皆洋字を以て譯せるものなり。又支那史を著作せるよし聞く。近來和蘭刻する處の書に、支那を言ふ條には、モリソンが語を證とすると有れば、蓋し其志を云ふなる可し。右の著書を以て考ふれば、千八百十七年我文政元年(文化十四年の誤ならん)にあたれば、今を距ること

凡二十一年なり。モリソン英敏の質と云へども、洋人の漢學をすること最も苦澁にして、成し難きこと推知す可ければ、此書二十歳の著として年齢を計るに五十五六歳の間なるべし。其人英邁敏達にして其國に於ては品級尤高く威勢盛なるよし、和蘭陀人往々稱する所十年シイボルトと共に來りし書記ビユルゲルと云者、長崎より瓜哇へ歸帆の時、臺灣邊に及で颶に遇ひ、檣折れ艦裂け、廣東に飄蕩せしとき適、モリソン留學の時に逢ひたり。此ビユルゲルは陰謀ある者にて、モリソンが名勢あるを知り、佞諛し、モリソンが周旋蔭扶を以て妻を英吉利斯より迎へ、又拔擢せられ、去々年長崎へ來りしときこれが爲に富豪に至れるとぞ。ビユルゲル長崎に在りしとき一子あり、蘭館出入商人藤吉英重と云者に是を附託して歸りしが、去る未平長崎に至り、越えて申年の春英重に申せしは、我今秋は歸るなれば、唯此兒

の後來を思に不忍、かく言ふは、リユスランド日本に垂涎すること最久し。必日本の憂北陸にあるべし、長崎は相去ること遠しと云へども、一支の痛は全身の患なり。是英吉利斯の風説、ビユルゲル日本に至るに依て其妻に告げたるなり、英重驚聳に不堪、此旨水府の吏に密に告げたる處如右。此ビユルゲルはモリソンが恩蔭深く蒙りたる者なれば、陰謀有るも不可知。されども、波羅泥亞を抜きしは明證あると也。波羅泥亞は、職方外記、坤輿圖說諸書に見えたる國にて、拂朗察のボナバルテに屬したるゆるゑ、歐羅巴諸國に忌まれ、千八百十五年國主卒し、無國主となり、南は獨逸、北は孛漏生と云國に蠶食され、東隅より内地は皆鄂羅斯の國に屬せり。(文化九年風説)然ども其は臣屬共にて治め、鄂羅斯より唯奉行を置いて其政を聽のみなりし。國人復國の念止まず。千八百二十九年文政十二年竊かに黨を結び、鄂羅斯

奉行と戦争に及び、文政十三年風説、ロシア國に對し、ポーレンの族徒一揆を起せし由告げ來る(千八百三十年)天保三年風説、全く此國を抜き、鄂羅斯の領となせり、其戦争拂郎察にて上刻せる者已に來舶して予是を皆寫せり。然ればビユルゲルが申事全く虚説に不可有。然れば是等を證とし、推してモリソンが事考へ察すべし。かゝる顯名の士、首として護送せる事なれば、本國の命を領し來れる事疑ふ可からず。殊にモリソン唐山の學を學び(按ずるに五車韻瑞の序は俗文にして意味通じたる者なり、正文なる者あるべきか知らず)亞細亞の人情を解し居る者なれば極めて其人を選みたるも又意あるが如し。抑我國外交の嚴なるは海外諸國の熟知する處にして、其證は諸地誌又鄂羅斯人たるクルウセンの記(奉使日本記事)ゴローキンの記(遭厄日本記事)に審なり。然れば漂人を媒酌とし交易を乞ふも行は

れざるは固より解して來るとなればレザノットの舊轍を不踏と必定なるべし。然る處、朝議鄂羅斯使節の例に隨ひ、彼國の故を以て御國政御變違なき事、縱令是より事生ずるとも動く可からざる大道なるべし。但西洋諸國の道とする處我道とする所、道理に於ては、一有て二無しと云へ共、其見る處の大小分異なきにあらず。是能彼を審にする者にあらざれば、盲瞽相象の如く、一尾一脚も象は即ち象なり。若し尾を撫で象を説かば、垂鼻長牙又いづくにあるや。夫西洋各國制度の汚隆、風俗の美劣、人物の賢否、不一と云へども、大抵性質沈忍(按ずるに地球中人質五種に分つ、ダルダリス、アチヲビヤ、モンゴル、カウカス、リニウスと云ふ、是を七種に分つても概するに諸種中、ダルダリス、カウカスを最とす、西洋はカウカス種、我國はダルダリの種に屬す)なるを以て、一國法を以て治め、君あり、師あり、君は子に傳へ、師は賢に

傳ふ。故に政教二道に分つ、下にあるも藝術又二學とす。其天賦の氣質に就き、道藝二學に就かしむ。故に志處を不賊して、其質の當然を勤めざるを責む。故に其の藝術精博にして、政教の羽翼鼓舞を爲事、唐山の及ぶ所に非ざるに似たり。是を以て天地四方を審にして教を布き國を利す。又唐山の及ぶ所に非ざるべし。今天下五大洲中亞墨利加、烏斯答羅利亞、亞弗利加三洲は已に歐羅巴諸國の有となる。亞細亞洲と云へども僅に唐山、我國、百爾西亞の三國のみ。其内西人と通信せざるものは只我國存するのみ。萬々恐れあるとなれば實に杞憂に堪へず。論すべきは西人より一視すれば、我國は途上の遺肉の如く、餓虎渴狼の不顧を得んや。若し英吉利斯交販の行はれざるを以て、我に説て云はん。貴國永世の禁堅く改むべからず。我國を始め海外諸國航海の者或は漂蕩し、或は疾病有る者地方に來

り急を救はんとせんに貴國海岸嚴備にして航海に害すること一國の故を以て地球諸國に害あり。全く天地を戴踏して類を害ふ。豈之を人と云ふ可けんや。貴國に於て能く此の大道を解し我天下に於て望む處の報を聞かんと申せし時、彼が從來可疑事實を擧げ通信すべからざる故を論するより外あるべからず。斯る瑣屑の論に落ちて窮まる處、彼が貪婪に名目生ずべし。西洋戎狄と云へども、無名の兵を擧ることなければ、實に鄂羅斯、英吉利斯の二國橫驕の端となる可し。(ボナバルテ厄入多^{エジプト}を攻るとき二恨を書し、一は地中海航海の害一は舊年の恨み)鄂羅斯は東漸して、東北西伯利より北亞墨利加の西岸に及び、地の方積三千餘里、地球四分の一を併せ有てり。英吉利斯は西漸して北亞墨利加の東岸より、内地加那拿に至り、亞西亞諸島、谷羅利の一部を略し、地の方積合算するに、二千里に及ぶべし。英吉

リスは知謀ありて海戦に長じ、鄂羅斯は仁政にして陸戦に長ず。其長を挟み私利を求む。是を以て英吉利斯我國に事を生ずるは急、鄂に在り。和蘭其間に介まり、僞詐百端終に内地の害を生ずべし。

按ずるに鄂羅斯禍心を包藏し、我輩に乗せんと欲する者の如し、然れども其實彼が涎を流すものは我にあらずして唐山にあり(モール陳情蘭人の話に符合)

夫唐山は陸戦に長じ海戦に拙し。其拙よりして是に乗じ海よりして其首を苦しめ又陸よりして其背を撲たんと欲す。

我が國の禍せらるゝは唐山にありては、舌亡膾寒の憂なり。英吉利斯能く之れを知り。委曲蜿蜒其の牙を磨く。然れば英吉利斯の我に要むる所、臚の蠅を逐ふが如く、拂へば必又來るべし。嗚呼天下の理勢、乘除相代、物極則缺、盛則衰、古者政教隆盛の地、皆北狄に併せられ

たり。唐山は固より論ぜず、佛降生の國、今即ち錫蘭は英吉利斯に據られ、天竺は昔は蒙古兒に併せられ、今は西洋諸國商館となれり。又回々生誕の亞刺比亞、ヨークン宗の盛なりし厄入多、英生誕の西齊亞、西羅馬と稱せし公斯當知は皆度爾格に食有せられ、全世界と稱したる羅馬、雅典變じて驕慢奢惰となれり。古の隆盛恃むに足らず。

今の無事亦忽にすべからず。夫唯其人に在か。西洋諸國の地を考ふるに、大抵北極出度七十度に起り四十五度に終り、其間五十五度以下を多しとす。是を我國に比すれば、奧蝦夷以下の地にして、人多きに非ず、土地廣きに非ず、耕すも食ふにたらず、織るも着るに足らず、肉を食ひ皮を被り、勞苦に習、衆を不恐、後來南化北移して、終に英達の君出で、今隆盛に及べり。然れば則土地豊福不可恃。人の衆多も不可喜、唯其勤惰に在らんか。凡政は據る處に立、禍は安ずる處に生ず。

今國家控る所の者は海、安ずる處の者は外患、一旦恃む可き者恃む可からず、去れば可安者不可安、然るに安頓として、徒に太平を唱ふるは固より論なし。三代綏服の制、秦漢禦戎の論を以て、今を論ずる者も、亦膠柱鼓琴の如し。如何となれば、唐山の地たる、重山復嶺南北を界とし、渺々たる沙漠其西を圍む。大寇推舉襲來すと雖ども、一方の地のみ、是に加ふるに世皆忽がせにせざるの地にて、屯田守戰、以逸待勞尤防ぎ易き者あり。且其徒も亦慄悍驕橫なり。北狄の利は北塞に居て南侵し易き耳。今我四周渺然の海天下萬國據る所の界にして、我にありて世に不備の處多く、彼が來る本より一所に限ること能はず。一旦事あるに至ては、全國力齊せんと欲するとも、鞭の長け短ふして馬の腹に及ばざるを恐るゝなり。況んや西洋臙腥の徒、四方明かにして萬國を交治し、世々擾亂の驕徒、海船火技に長ずるを以て、我

短にあたり、方に海運を妨げ、不備をおびやかし、以逸攻勞、百事反戻して、手を措く所なかるべし。維昔唐山滉洋恣肆の風轉傳して、高明空虛の學盛なるより、終に光明蔽障せられ、自から井蛙の管見に落るを不知也。況んや明末典雅風流を尙び、兵戈日に警むと言へども、苟も酣歌鼓舞して、士氣益々儂薄に陥り、終に國を亡ぼせるが如し。嗚呼、今夫れ是を在上の大臣に責めんと欲すれども、固より執袴子弟、要路の權臣を責めんと欲すれども、賄賂の倖臣、唯是有心者は儒臣、儒臣亦望淺ふして大を措き小を取り、一々皆不痛不癢の世界と成れり。今夫如此束手して寇を待たんか。

夢物語

高野長英

冬の夜の更行儘に人語も漸に聞へず、履聲稀に響き、風の音妻戸を叩き、もの思ふ身は殊更に睡もやらで、獨机により燈火をかゝげて書を

讀けるに、夜いたく更ぬれば、いつしか眼もつかれ氣も倦て、夢と無く現と無く恍惚たる折ふし、ある方へ招かれいと廣き坐敷に至りければ、碩學鴻儒と覺ぼしき人々數十人集會して色々の物語りし侍りける。其内に甲の人乙の人に向て言けるは、近來珍敷噂を聞けり、イギリス國のモリソンと云ふもの頭となりて交易を願ふよし和蘭陀人申出しとなん。そもイギリスといふはいかなる國に候哉、乙の人答けるはイギリスと申國は和蘭陀の北にあたり候島にて、和蘭陀の王都アムステルダムと申候より海上百十八里計りを隔り、順風の時は一日一夜位で船通用いたす所にて、國の大きは日本ほども有之由にて候得共、寒國故か人數は日本よりは少なく、摠括して人口一千七百萬六千人と申候、國人勇健にして法律に勉強して倦怠せず、好で文學を勤め、工技を研究し、武術を練磨し、民を富し、國を強くするを專

務と仕候て、濱海淺灘暗礁多く外寇入難く候に付、近年歐羅巴大亂の時に當つてもイギリス孤立して國民干戈の災を免れ申候。國都ロンドンと申所は至て繁昌の地にて街坊美麗人戸稠密にして、人口凡百萬人計も居候由、海運の都合宜所にて専ら諸方に交易をいたし諸國に航海仕、不毛の地を開き人民を蕃殖し、夷人を教導して是を服従仕らせ、此節に到ては外國領分の人數七千四百二十四萬人と申候。左候時は本國の四倍にも到申候、其國々の名は一は北亞米利加と唱て南亞米利加の西側に御座候。二は西印度と名付候所に御座候。三はアフリカ洲の内にて南西に當る所に候、四は新和蘭陀と申候て日本の極南に當り申候内を領申候。五は南亞米利加と申候て、ブラジリイ國并にカリホルニヤ邊にて、日本の東に當り候所に御座候。六は天竺の内モホル杯唱候國の内にて、雲南邏羅の南にて天竺の地

に御座候。七は東天竺と申候て日本近海の東洋の諸島無人島近所より南の島に御座候。以上の國々に夫々諸役人ども差向支配爲仕候故、其者どもの乗候船は軍艦にて一艘に石火矢四五十宛も備へ申候物を造差遣候由に御座候。其船の數二萬五千八百六十艘と申候、其船に乗候上役人十七萬八千六百二十人、下役人は四十萬六千人、水主崑崙奴炊奴等取集め惣括百萬人程有之べく誠に以て廣大なる事に相聞申候。右故自然航海の術并に水軍は殊の外熟練仕候。外國出帆の所次第に廣大に相成、交易の道も漸々旺盛に相成、凡五大洲の内比聯無之様に相成申候に付諸國の者共是を恐羨み申候由に御座候。支那にも前々より交易仕候に付廣東の側に地所を給り商館を營み、右へ總督并に諸下役差遣置年々南海諸島并にアメリカの産物を集め、數十艘に積籠廣東へ輸送致専ら茶と交易仕、右を本國へ送り候事

に御座候。然る所イギリスは雲南暹羅等に領分有之支那の屬國に堺を接候に付邊民共擾亂仕、界を越へ互に鬭爭接戰仕候事時々有之候故、支那人、イギリス人を疎じ申候。加之ホルトガル(即ち日本の南蠻と唱ふるもの)和蘭陀人等も廣東へ同様交易仕候に付、イギリスの交易盛に相成候得ば自然各自己の衰微にも相成候故色々讒言を構へ誹謗仕候に付元よりホルトガル和蘭陀は清朝革命の頃大功も有之夫々廣く地面を給り外ならず親愛を受候ものの儀に付右讒言を信じ、猶々イギリスは忌憚られ交易は物捌方も不_レ宜。既に乾隆の末には貸しのみ日々増し多相成、交易方立行不_レ申様に至り候。依之本國にても色々評議いたし、以來廣東交易休候方可然_レ杯申候も有之候處、近來イギリスにて茶殊の外流行仕、人々相用ひ候儀に付、支那交易相_レ休み候はば右缺乏致し迷惑相成候。且又イギリス領南海島天竺及

二二〇
アメリカ邊茶多有之候得共、其品支那産には遙に劣り不宜、其上一旦に右間に合候程澤山には迎も産し不申候事に付、交易相休候事も難相成、仍て猶又評議致し候處、右交易方不取揃之儀は廣東下役人の御爲にて全く支那帝の意に出たるには無之様考へられ候に付、其頃嘉慶帝誕生ありしかば、右誕生を賀し貢物を北京に呈候を名として、使節を遣はし、直に帝へ愁訴仕候方可然と申事に一決仕候て、本國より人物を選出ロルトマアルテネーと申者其撰に當り、正使に仕り天文・地理・醫術・物産は支那にて未熟の由に付、右に熟練上達仕候者を撰み同船爲仕右に關係仕候書籍は勿論諸器物に至る迄一切相整其外支那通譯の者迄相選正使副使の船各一艘、兵糧船案内船都合四艘にて本國を乗出し、其序日本朝鮮へも交りを結び度、國王の書翰相添遣候由相聞申候。右に付廣東交易の様子宜相成候處、近來にては廣東に

西洋諸國の商館中イギリス館尤大に相聞申候。甲問て曰くモリソンと申者名の聞へ候者に御座候哉、承知仕度候。乙の人曰、隨分及承候者に御座候、右は元來イギリス人にて碩學宏才の者に付、彼の國學校の教授に選れ俸祿五六千石に當り候程の者に御座候。この者イギリスの支那に嫌忌卑蔑せられ候を歎き、右は全く言語文字相通し不申故の儀と存じ、右相通じ候様仕度存意にて、二十餘年前より廣東へ態々罷越遊學仕既に五車韻瑞杯もイギリス語にて翻譯いにし開板仕、漢學出精仕り可なりに文章も書ける程に相成、近年にては餘程高名に罷成候に付官位も進み職も重く用ゐられ、廣東交易吏の總督とか迄相成、東海中の諸軍艦一切支配仕候由に付少くも水軍二三萬位は撫育仕候様相聞申候。左候得者此方の四五萬石位の大名にも當り可申哉と被存候。甲の人又曰く元來漂流人の儀は和蘭陀人へ

托し送遣候様被御渡置事にてイギリスも和蘭陀隣國の儀につき右も心得居可申候。既に先年備前の廻船イギリス領の天竺島へ漂着いたし候處、イギリス人は和蘭陀へ渡し送遣候事有之候、然る處此度態々自國の船へ乘且又右漂流人送遣候迄に候得者船頭は何者にても可然の處、右様高官重職のモリソンと申者頭取仕候て送來候事一向合點行不申候、御高見も候は、御腹藏なく御話し聞せ被下度候。乙の人曰く何様是には深き仔細も可有之候。但イギリス人に面會承不申事候得者其事情確知は仕がたく候得共、先づ愚意を以て臆裁仕候に是まで數十年前より頻りに日本へ交易を願度趣に相聞え、せめては海上通船の砌薪水缺候節は右のみも願度趣種々工夫仕候由に候得共、素より言語文字も通不申事にて申上候事相成不申且御宥免も無之、唯イギリスと唱候得者海賊とのみ被思召御取合も無之。

—— 渡 邊 華 山 ——

—— 慎 機 論 ——

右の船國地へ近寄候得者、有無の御沙汰なく鐵砲又大砲にて御打拵に罷成、凡世界中如斯御取扱無之方に候。いづれ是は蘭人利己の爲め申立候てイギリスは海賊とのみ讒奏仕候故の儀と奉存候。依て此度漢文自得仕候者に命じ罷り出立たせ候て右の趣巨細に訴訟申上候事と奉存候。又直に罷出候ても御取合も無之候得ば、漂流人を送來るを名目に仕候儀と被察る、又前以て蘭人に傳書仕候趣にて考候處、近き内江戸近海に船を寄せ候者は即モリソン船との儀を御知らせ申上候て、御打拂も免され度存慮の外無他事様子と被存候。又長崎へ不罷越直に江戸近海へ船を寄候儀は、右に申上候乾隆の末年貢船の砌の貢物殊の外手重にて、廣東より陸地運送相成がたく、依て北京近海に船を寄せ度段願候て、廣東諸附役人を避け直ちに其下役人の惡行等愁訴仕候事と一般の心組にて、長崎に罷在候蘭人の邪魔

并に讒奏を避る存意と被考候。甲の人又曰く當御代の最初より蠻國交易は和蘭陀のみにて、他には御免無之、鎖國の御政道に付き迎も交易御免の儀は思ひもよらず、兎角近付候ては面倒に候間打拂候事に御定め有之候へば、此度も御打拂有之と被存候。左候はば先方の者共如何心得可申哉。乙の人曰、西洋諸國にては殊の外人民を愛憐仕人命を救候は何よりの功德に仕候事にて、既に先年デネマルカと申國とイギリス争戦の砌イギリス水軍デネマルカの都コーペンハーカと申所へ押寄候處、同都防禦の備甚だ嚴重にてイギリス人大に敗北仕候、其節一軍艦石火矢の爲め大に破損仕、既に覆没溺死に臨候處イギリス人急に一詭計を考出し船中にデネマルカ人数十人捕置候間、右差出可申候間暫時砲礮見合吳候様頼入候處、デネマルカ王是を承り、詭計とも被存候得共、一軍艦を殺し盡し候とて始終全勝利

と申事にも無之、若又其内一人なりとも自國の者船中に有之候得ば骨肉を傷ひ候に相當り候間、態と見合せ石火矢を放不申内イギリス人軍艦を取繕ひ逃去り候よし相聞申候。右等の振合にて考見候得ば西洋の風俗はたとひ敵船に候共、自國の者其内に在之候得ば漫に放砲不仕事に御座候、然る處イギリスは日本に對し敵國には無之、謂は、付合も無之他人に候處、今般漂流人を憐み仁義を名としてわざわざ送來り候者を何事も取合不申直に打拂に罷成候は、日本は民を憐まず不仁の國と存候、若又萬一其不仁不義を憤候は、日本近海にイギリス屬島夥しく有之始終通行致候得ば、後來海上の寇と相成候は、海運の邪魔に相成候哉も難計、左候は、自然國家の大患にも相成申候。たとへ右等の事無之候とも右打拂に相成候は、理非も分不申暴國と存じ不義の國と申觸られ、義國の名を失ひ是より如何

なる患害萌生仕候哉も難計、或は又頻にイギリスを恐るゝ様にも考
付候は、國內衰弱仕様にも推察仕候。乍恐國家の御武威も損候様
にも相成候はんかと恐多くも被存候。甲の人曰く然らば如何取扱
ひ可然哉。尤是は御政事に響き候事にて容易ならざる大事に有之
候得共、御存入も候は、無御遠慮御咄見被下度候。乙の人曰く是は
國家の御政事の事、中々愚昧の賤民抔可申上も恐ある事にて候得共
芻蕘の言も取有るの古語も候得ば、恐多くも愚存可申上候。先唯今
イギリス人の底意兎も角も彼れ仁義を唱へ漂流人を送來候とも江
戸近海は御要害の地にて着岸御免難成候は、長崎成共何方成共着
岸御免被仰付右漂流人御請取被遣、右の御挨拶として厚御褒美御惠
被下置、先第一愚案は、當時和蘭陀人は外國の耳目官に被仰付候得共
彼等は支那韃靼天竺其外諸國通商仕何方も俗に申得意且那にて候

得者、彼是と格別利害無之儀は御注進可申上候得共、支那魯西亞其外
諸國通商の國の動靜日本に係り候事抔申出候得者、一方には大功有
之候得共、一方には大害有之候事にて他日彼が爲めに宜からざる事
故、右等の大事は決して不申上様にも被考候得者、今度イギリス罷越
し候こそ幸の時節に付、當時清朝魯西亞其外近國の事情御尋被仰付
候は、彼れ此度一廉の功を立候事、交易を願度存意十分に候得者、定
めて的實詳細に言上可仕、左候へば坐して當今外國の眞實なる事情
を詳にし、不勞して蘇武張騫を得る如く願つても無之國家の御大幸
に候。然して彼より願上候儀は一旦御開届被遊候て扱交易と云ふ
所に至り候て國初より御規定の處厳しく被仰渡斷然として御制禁
の旨被仰渡候は、我に於て仁義の名を失はず彼に於ても又如何と
も可致様無之恨も憤も仕間敷萬事穩に相濟可申と被存候。文化年

中魯西亞の使節レザノット日本へ罷越て交易を願ひ不叶本國へ歸候て申譯無之を歎き自殺仕候に付其下役人ホシーウ是を恨み只一艘の船にして蝦夷の騒動を生し、國家幾多の御物入を奉掛候。此度のモリソンは近く廣東に罷越、其上軍艦を數多支配仕殊に日本近海屬島多く魯西亞レザノットの類には無之非法の御取扱有之候は、後來如何なる患出來候哉。實に可恐奉存候。猶又此度漂流人と唱候者舟方蠢愚の者に候哉、但又佳成文才有之者に候哉不詳、何様此度モリソンの罷越候事は尋常の事とは不被存、但右申上候儀も方今文明の御世、明君賢相上にまし、御良策被爲在候得者申上候迄も無之候處、至愚の我輩忌憚からず其職にあらずして國家の御政事を論ずる様相聞へ其罪輕からぬ事に候。強ひて仰を蒙り候故申上候事に御座候。尤も是は國を思ふ忠膽より出候儀故深く御咎被下間敷

—— 渡 邊 華 山 ——

慎

機

論

杯と咄すを聞る内に木柝の音におどろき夢覺て見れば、今まで集會の席と思ひしは我寢室にて、我に對する人も無く、燈の影いと暗く鶏の音遙かに聞へ、夜もはや明なんとする有様なり。左思右想するに是は醒るに似て覺るに非ず、夢に似て眞の夢に非ず、奇怪不思議の事にあれば筆を採り覺へし事共を記し置ぬ。戊戌冬十月夷日の明日しかし事情の十分に明かでない當時のことでもありますからまことに據ないことでもあります、和蘭風説書に來航するとあるモリソンは實際人名でなくて船の名であります。又此モリソン號と云ふ船は英船ではなくて、米船であつたのであります。それがどうして間違つたかと云ふと、英國の東洋學者にロバート・モリソンと云ふ人があつて、之は先生長英等の云ふ如き碩學でしたが、漂流民護送とは沒交渉であります。米船モリソン號は商船で、既に天保八年六月浦賀に來て我が漂

流民四名を送還して且つ互市を求めたのであります。我邦では文政打拂ひの令に依りて容赦なく砲撃しましたから、去つて鹿兒島に往き、書を薩摩藩侯に致さうとして拒まれ、勿々として澳門アカサに歸つたのであります。此船が米船であつたとは幕府は全く知らなかつたのです。ところが奇體にも此前年來航したモリソン號のことが翌年、和蘭の甲比邊丹から來航するとして風説書に記され、報告されたのであります。所が一向無我夢中であつた幕府は過去の事實を將來の出來事と信じ、モリソン號來航すれば擊攘すべしと議決しました。それを傳聞して、先生及長英等は英國の東洋學者と誤信されたのであります。あの時代のことでありますから、此う云ふ行違ひは仕方がありません。モリソンの船か人か分らない時代に、先生達は碩學モリソンのことを善く知つて居られたのであります。又先生達の意見は獨り此事のみではありま

せん、高處に立つて天下の大局から論ぜられたので、其識見の卓拔してゐるのと、憂國の至誠の溢れ出たのとは、醉生夢死者の夢想し能はざる所で、賤々たる當局者はよろしく愧死すべきものであります。しかし高木は風に折られ、出る杭は打たれる例に漏れず、圖らず、此先見の明が先生及其一派に大なる禍をしたのであります。

十五 投獄

高明の家は鬼が瞰うかがふと云ひます。昔し孔子は陳蔡の間に苦まれました。釋迦は惡魔の爲に屢責めさいなまれました。イエスキリストはとう／＼十字架の上の人となつたのであります。偉人英傑が災厄に罹り、其極非命の最期に遭つたことは數へ盡せないほど澤山世間に例があります。しかし其身は死んでも其精神は永とこしへに盡きる期があり

ません。偉大なる感化の力は永遠に生きてゐるものです。

天保十年正月、幕府は目付役鳥居耀藏(忠耀)に浦賀方面の海岸實測と砲臺及船艦の検査をと命じました。此人は林大内記衡の次男で、林大學頭煌の弟に當ります。家は代々當時の帝國大學とも云ふべき昌平黌の總長で、學權を握つてゐる儒者の家柄であります。儒者の家柄に生れた耀藏が蘭學者を憎んだのは、一つは學派の異同から來たのであります。しかし脩身正心を以て第一義とする儒學を修めたものにして蘭學を喜ばぬと云ふことなら、正々堂々議論の上で争つたがよいのですが、此耀藏は陰險猜忌の腹黒い小人でありました。此男は此事件のみでなく、後年矢部駿河守を憤死させました。菲山代官江川太郎左衛門は鳥居の巡檢地方が、自分の所轄地であるところから、幕府に請うて、鳥居と俱に巡檢しました。丁度此頃高野長英の夢物語が將軍の内

覽に入りて、將軍には深く之に感心せられて、其作者を物色すると云ふ噂が世間に立つてゐた時でありますから、鳥居は老中に訴へて蘭學の徒を處刑し、蘭學を禁止せんことを以てしましたが、別段何等の反響もありませんでした。

投 此蘭學嫌ひな頑冥不靈の鳥居と江川坦庵とは正反對であります。

前申通り坦庵は先生と親交があり、進取の意見を有してゐた活眼家で、凜乎たる氣節を有する大丈夫でありましたから、鳥居とは固より意見が合ひません、性質もまるで違つてゐましたから、相容れる所がありませんでした。此耀藏の部下に小笠原貢藏なるものがありました、多少測量術をも心得てゐたから、實測に着手し、製圖しましたのを、耀藏から坦庵に示しました。江川はもとく、正役なる鳥居に對して副役でありましたから、一切嘴を容ませませんでした、此貢藏の實測圖を見ると、餘

りに粗漏で、不正確であるのに呆れました。けれど其場は默然としてゐて、別に正確なる製圖を計畫し、測量方の周旋を華山先生に依頼して來ました。先生は高野長英と相談の上、長英の門人内田彌太郎・奥村喜三郎を推薦せられ、又齋藤彌九郎の紹介で田原藩士上田嘉作を内田の從僕として遣はされたのは此時のことです。しかし人の功を猜さむのは小人の常でありまして、貢藏は二人に功を奪はれやしまいかと華危み耀藏は坦庵の爲に鼻を折られるを恐れました。そこで陋劣な手山段を施しまして、坦庵にも相談せずに、權柄づくに奥村喜三郎が増上寺領の役人であるのを奇貨とし、出家の下官は古來國事に與ることがないから早速江戸に歸れと無法な申渡を致しました。坦庵は憤然としましたが、無理やりに己を抑へまして、内田に浦賀海岸の測量をさせ、江戸に歸つて先生長英等と研究して實測圖を作り、詳細な説明書を附して

之を幕府へ差出しました。鳥居も小笠原貢藏の實測圖を差出しましたが、坦庵のとは雲泥の相違で、其精粗確否は固より同日の話ではありません。坦庵の評判の善いのに反して、鳥居はひどく器量を下げました。鳥居の遺恨はやる方なく、是非とも坦庵を擠おとしりたい、坦庵を擠す手段としても先づ平生憎んでゐる蘭學者を一掃しやうと企てました。

華山先生と長英とは其慘酷な爪にひつかゝつたのであります。

恰も此時江戸で無人島開墾を計畫した一團のものがありました。

獄 無人島とは今の小笠原島のことです。之を計畫したものは、日本橋本石町三丁目の旅人宿山口屋彦兵衛の後見人金二郎を初め、蒔繪師秀三郎・交替寄合福原内匠の家來齋藤次郎兵衛・阿部友進・納戸番花井虎一・徒士本岐道平・常陸鹿島郡鳥栖村無量壽寺僧順宜・同伴順道等十餘人でありました。金二郎は蘭學を好み、地理物産の事を阿部友進より教へら

れてゐましたが、同志を募つて無人島に航し、殖産興業に従事しやう、若し海上で風波に遭つて、呂宋廣東米國にでも漂流したらば、外國見物をして來ようと、おさく企て、やがて準備が出来たならば幕府に願つて許可を得ようとしてゐたのであります。之を聞き知つたる小笠原貢藏はときこそ來れとばかり胸に一計を案じて、花井虎一を招きましました。さて貢藏は虎一に云ふやう、近頃蠻學(蘭學を指す)の徒が殖産開拓に名を假りて、先づ無人島に渡航し、追ては異人どもと交易をなさんと山の計畫を致し居るさうな。容易ならざる事なれば、其筋にても密々に探偵致居り、近いうちに盡く搦め捕り、嚴重に處罰せんとの御内議である。此一件は内密の事でござれど、貴殿とは格別の關係なれば特にお話し申す、必ず他に漏さるゝなと素知らぬ顔にて云へば、根が淺はかなる小人のとであれば計られるとはつゆ知らず、顔色を變へて、自分も其一

味なる旨を告げ、只管に罪科を免かるゝ道を尋ねました。すると貢藏はしすましたりと思ふ心を顔にも出さず、貴殿某の指圖に従はば、禍を轉じて福となすであらう。「そりやどのやうに致しましたら」。斯うでござる。近頃政府當局では蠻學者どもが濫りに邪説妖言を唱へて民心を惑はすを惡ませられ、彼輩を一掃しやうとの思召である。然るに彼輩も巧に法網を潜るが爲に捕縛するの道がない。就ては貴殿此際勇氣を出し、無人島渡航のことは蠻學者の教唆に出づるものとの旨を鳥居殿に訴人あらば、鳥居殿には喜で貴殿の罪科を赦さるゝは必定、拙者も旨く取り做せば、貴殿出世の絲口ともなるであらう。決して疑はずにおやりなされ。」と言巧みに指示せば、虎一は一も二もなく承知して、鳥居耀藏に密訴しましたが、其趣意は斯うであります。

近頃蠻學が大に流行して、天文地理の大から醫學本草の末に至るま

で蠻學を以て之を講究して、日に盛なる勢である。大名では薩摩の島津・田原の三宅の如き、旗本では寄合衆の松平内記・使番の松平伊勢守・兩番の下曾根金三郎・代官の江川太郎左衛門・聖堂附儒者の古賀小太郎及羽倉外記の如き、評藩の臣では紀州の遠藤勝助・水戸の立原任太郎・雲州の望月菟毛・庄司郡平・田原の渡邊登・鈴木春山・岸和田の小關三榮の如き、又町醫高野長英の如き、いづれも蠻學を尊信し、甚しきは夢物語・缺舌小紀などを著して妖言を放ち、政府を譏り、人心を惑はすこと言語同斷、沙汰の限りである。此頃に至ると、遂に無人島渡航の計畫を致せるが、是れ全く羽倉外記・江川太郎左衛門等の贊同に出たもので、其名は無人島開墾ではあるが、實は外國に渡航して私に交通を開かうとする意に外ならぬ。又風説に據ると、彼の蠻學者中には先年大阪にて謀反したる大鹽平八郎と親しく交際し、其逆意に與し

渡

たものもありとか聞き及ぶ。

鳥居は直に之を誇大して閣老水野越前守に申しましたから、尙齒會の首領に向つて逮捕の命を下したのであります。つまり華山先生や高野長英を處罰して、追つて江川に累を及ぼさうと云ふ鳥居の計畫であつたらしうございます。高野長英が獄中から立原杏所(任太郎)に與へた書中にも

投

或人の説に、宿儒先生(艦藏)の父林衡(夢物語)を一見して申けるは、如此書述ぶる者は可斬となり、又華山西學を好候を甚だ忌候由。又華山の西學を助くるものは、小生竝三榮と申、是又殊の外惡み被居候由、是れ一原因と被存候。又當春江川鳥居兩君浦賀巡見の節、海岸諸處測量之儀に付、其間不和の由承候。是は鳥居君に従居候御小人目付小笠原貢藏と申者、少々町間術心得居候方歟、大抵繪圖書認候處、其仕

獄

力不宜敷方歟、江川不服、仍て華山紹介にて、小生社中の奥村喜三郎内田彌太郎を招候處、貢藏右を恨み候儀に付、竟に其端を啓き候由、是又一原因と奉存候。扱て貢藏兼々虎一懇意の由にて、右を欺き出訴爲仕候にて、華山小生竝一體西學者流不殘吟味爲致候て、江川羽倉にも波及爲致度の存慮と相見へ申候云々

六月初六日

と云つてあるのは、實情を盡したものであります。

蘭學者逮捕の風説は、それとなく世間に傳りましたから、先生は長英を招いて、告げられますには、政府が蘭學者を捕縛するとの噂は事實であらう。缺舌小説と云ひ、夢物語と云ひ、我等には尋常の説なるも、世人或は之を奇怪と見るであらう。之を奇怪となさば、人を惑はすの妖言なりとするものもあらう。此時に平生我等を惡むものが讒訴すれば、

投

獄

政府當局者はこれを容れるであらう。斯くなれば君と僕とは必ず免るゝことが出来ぬ。憂國の至誠から出たのではあるが、自ら知見に誇りて世俗を驚かしたと云ふ點は、我等も用意の周到を缺いた責がないでもない。とにかく覺悟をせねばならぬ」と斯う云はれまして、同志者下曾根金三郎は、町奉行筒井伊賀守の次男であるから、私かに尋ねて見ようと相談が畢るか畢らぬうちに、町奉行大草安房守から

渡邊登儀御尋之筋有之候に付、差添人附添即刻安房守役所へ可罷出也。

との召喚狀が参りました。先生は長英を顧みて、果して世評通りである、我々の前途ももう知るべしだ。此際後事に就いて相談の暇もない、唯天命に任すばかりである、君も同様であらうが、くれぐれも自愛し給へよ」と云へば、長英は點頭くのみ。二人相見て、しばし默然としてゐま

した。そこで先生は直に町奉行の役所へ往かれました。尋いで先生の家は家宅搜索を受けましたが、此際蘭書や往復の書翰やともに慎機論の草稿も没収されたのです。此時先生の宅に出張した捕吏どもは、如何に小藩だとして、華山先生は家老であるから、定めし道具類も多からうと豫想してゐましたところが、書籍と書畫とより外に何物もありません。是はきつと隠してあるだらうと尋ねますと、先生の夫人はお耻しいがと、質屋の通帳を出して見せましたので、一同は、其清廉なるに感じて、言葉がなかつたと云ふことです。

長英は下曾根金三郎の家へ往つて先生の事情を探知しやうと思つたのですが、もう先生は役所から投獄され、捕吏どもが家宅搜索に出張したと云ふこと、又長英の家にも捕吏の赴いたと云ふことを聞きまして、一友人の許に参りました。すると、其友人は暫く身を隠して讒

者の毒手を免れよと勸告しましたが、長英は聽き入れず、逃げ隠れたらば前途は暗黒で、一生埋木である、華山が投獄せられたのも我が夢物語が累をなしたと云ふことであるから罪を人に嫁して我のみ逃れるべきものではない。直に自首して罪なきを陳辨致さうが、唯氣にかかるは老母のことである、平生赤貧洗ふが如き事であるから、老母を扶助するものがない、是ばかりが後顧の憂ではあるわい。」と、そこでこま／＼

と書面を作りて、之を親友の鈴木春山に送りまして、後々のことを頼み、快く北の町奉行所へ自首しました。三宅友信君の華山先生略傳中に、長草は才織不凡なれども性質褊急にして老母に順ならず、先生深く之を憂へ屢、諷諭し遂に至孝の人となれり、中島源之助之を言ふと見えてゐます。長英が母を思ひながら、後髪引かるゝ思で自首した記事を読みますと、先生の感化を思はないわけにはゆきません。先生と殆ど時

を同うして捕へられたのは、無人島渡航一件に關した人々でした。先生が町奉行へ赴かれましたのは、天保十年五月十四日のことでありま

渡

邊

華

山

畫に於ても人格に於ても、名聲嘖々たるものがありますから、町奉行大草安房守も其冤罪であるを知つて之を不便と思ひました。吟味方中島嘉右衛門と云ふのは畫を善くし、號を雪居と稱して先生とは親しい仲であつたから、獄中の先生を勞はること一通りでなかつたのです。取調べの際に先生は屈する色なく抗辯されましたが、中島は先生の家の壁から剥ぎ取つて來た支那の魏の高士嵇康の養生論中の一節、

思慮銷其精神、哀樂殃其平粹、夫以叢爾之軀、攻之者非一途、易竭之身、而内外受敵、身非木石、其能久矣、

(思慮は其精神を銷し、哀樂は其平粹を殃す、夫れ叢爾の軀を以て、之を

投

攻むるものは一途に非ず、竭き易きの身にして内外敵を受く、身木石に非ず、夫れ能く久からん、

と書いたものを示して、當今其方の身分は此語に能く相當してゐる。

かやうな不吉な語をなぜ書いたか、此度の前兆と見るべきである。」と暗に敵黨の陥擠となつたことを嗟歎しましたから、先生もはつたと膝

を拍ち、感慨に堪へぬ面色で、昔し蘇東坡が言を以て罪を得た時に常に此養生論を認めたと云ふとを如何にも唯面白く感じて壁書として置

獄

いたのに、今日獄裡の人となりて見れば、此語讖をなす如く覺えます。嗚呼之も天命で御座らう、と申されまして、これからは抗辯もされずに、天命に任されました。此裁判中に先生の所藏された蘭文の地理書中

に日本島無人島のこと書いてありまして、そこに紅唐紙が張つてあつたのを示して「これはどうぢや」との詰問、先生は一向平氣で、それは多

分前の所藏者のしたことで御座らう、拙者は少しも存じません」と答へられたので、人々其頓智に驚いたと云ふことです。

五月十五日町奉行所へ呼び出されて、其日から入獄、同二十二日改めて揚屋入(入獄)を命ぜられ、其歳一抔、即ち十二月十九日田原蟄居の沙汰があつたまで慘憺たる獄中生活を送られたのであります。

邊 獄中生活はいつの世にも悲惨のものであります。此世からなる地獄と云ふとは、今も昔も變りませんが、しかし江戸時代あたりの獄中生活は又格段でありました。天保十年六月二十九日、もう暑中でありましたが、其時先生からの書面に獄中の有様を述べて、

諸牢と申すは、私逗留の場所第一番の所に御座候へ共、三間に四間の場所、皆板敷に疊を敷き、上の通り、私共三人一疊に一人に御坐候。

下は若隠居、インキョ假座、客座、其外役人等、一疊に二人三人四人、小座

と申すは一疊に六人位、朝夕の法尤厳く、位置などは非道刻薄なるものに御坐候。明り取は、下ハメ四尺より上に有之、格子の太さ四寸角、其間三寸ばかりの處より、風氣日光相通申候。右牢の外押も又右の通りの大格子故、陰に翳雲の如く、火熱はタ、蒸し候如くに御坐候。唯心氣を落付け、靜座候へば、如何様にも凌可申、色々心配仕候時は、凌ぎ難く御坐候。其上右の内、大ナガシ水ツカヒ、諸食物の賄有之、又湯を入候も、厠も間際にて汚穢に不堪候。住めば都、馴るれば故郷、合牢の者皆愁人ならざるはなし、乍去博徒多く死刑の者は無之、付人と申し私共召仕候者は、無宿者、百姓仲間の者多く、存外人情相親み候者として、タトへば相助合候様なる情出來致し候者に御坐候。其中私などは、誠の無實清潔なる人にて、皆人々のアキラメの爲と相成候など、曰ふて呉れ候へ共、忘れては相嘆き申候。不孝の身にて氣は張り候

ものゝ如何にも病を受け相に存候。

とあります。猶此書面のつゞきには、無人島一件で入獄したものの六人のうちで此六月まで死去一人大熱病三人とあります。立原任太郎へ送られた書面にも、毎日聞見する處、先づ眞の地獄にて誠に能き稽古仕候、昨今大になれ候而、夜中も蚊に喰れながら寢入申候とありまして、此邊世からなる地獄の中で、先生は、疥癬を病まれながら、幸に無事でありました。之は先生平生の修養が現はれた結果に外ならぬと思はれま由す。獄中よりの書にも、唯天命にまかせ候計に御座候、天命に任せ候へば心にかゝる明月の雲の如くに御座候と云ひ、此節飲食を攝養第一に仕、達磨面壁の心持にて、なるたけ雜慮妄念を去り候工夫仕候と云はれてゐる如く、先生平生の修養は此に現はれてゐます。昔し宋の文天祥が蒙古に捕れまして、土牢の中へ投ぜられました。水の氣や火の氣

や暑熱の氣や汚穢の氣などが此土牢に縦横無盡と侵入して、大抵のものには病氣となりましたが、平生體質の丈夫でない文天祥は之に抵抗して、二年も無事に獄中生活を送りました。それを自分が説明して、孟子曰く我れ善く吾が浩然の氣を養ふと、彼の氣に七あり、吾氣に一あり、一を以て七に敵す、吾何ぞ患へん、況や浩然なるものは天地の正氣なるをや」と云つて居ります。そこで文天祥は正氣歌を作つて、

一朝蒙霧露 分作溝中瘠、如此再寒暑

百沴自辟易 嗟哉沮洳場 爲我安樂國

(一朝霧露を蒙らば、溝中の瘠となるを分とす、此くの如くにして再寒暑百沴自ら辟易す、あゝ沮洳の場、我が安樂國たり。

ひよつと病氣となると死んでしまふとは承知してゐるが、こんなことをして二年も居るのに、病の方から閉口してやつて來ない、このや

獄

うな水のじめくしてゐる處も私に取つては安樂世界であるわい。)と氣焔をはいてゐます。畢竟先生も浩然の氣を養つて居られたから獄中生活も先生の身を害するに至らなかつたのであります。けれども先生は親思ひの孝子であります。今度の不慮の災難が発生して、投獄されると、念々忘れ得ないのは老母のことでありました。之を思ふと、健氣な先生の腸も九廻するやうであつたのです。

—— 山 華 邊 渡 ——

已後決獄之上、老母面會も出來不申義に及候得者、老母必憂死可仕、況小生生存之所存無之

と嘆かれ、

扱只今に至り誠に恐怖致候は、妻子は一生不相見とも宜敷候得共、老母計はせめて終生事へ申度候に付、何卒御預けに相成候は、御在所へなりとも參り度候得共、多分六ヶ敷別れなるべし、

—— 投 ——

と落膽せられ、

唯心に不堪ものは老母にて候。私追々積年の工夫にて、養老第一に心がけて唯安心のみいり、人にも仕合など被申候得ば、うそにも嬉候場に到り、一時の奇禍にて百日の說法屁一つと相成云々老母事唯一刻も忘れ不申、夜中毎に母を呼候とて同室のものに被笑申候。思ひ出候得ば、唯落涙のみにて赤子の如くに御座候。私母を思ふこと如此、母私を思ふことも又倍し可申、然れば何卒母の私入牢を嬉候程に安心致候様、兎に角御工夫奉願候。室中同居のもの、皆私より下席にて候間、我ま、一倍仕候。始より私名前承知致、皆先生先生と稱し、役人なども色々風流のこと聞に參り、申さばきうくつなる湯治に御坐候。依之此段よく御申聞可被下候。

と懸念せられ、或は

—— 獄 ——

其間老母苦勞不致様御さとし可被下候。約る處死には不仕候。御裁許の上、又々陽氣に相樂、孝養第一に可仕、此禍却て目出度筋に御話可被下候。

と寄語し、或は

あさ繩にかゝるうき身は數ならず、

親のなげきをとくよしもがな

渡 華 邊 山

と歌つて思を遣られました。まことに一字一涙、傷心斷腸の事であり

山 ます。 全く先生の入獄は青天の霹靂で、意想外千萬のことです。先生が獄中から寄せられた書中にも、斐洋學候に、拙者を首として事を起し候事、不審に御坐候、殊に其通之御遠慮ならば、先前廣に禁洋學あるべし、御觸流にても事は行はれ可申候、然るに其趣意頓に變化仕候義、又春夏の交

俄に事を生じ候儀、恐くは小笠(小笠原貢藏)の嘘吹と存候、其分けは草尹(大草安房守)の御沙汰に鳥印(鳥居耀藏)申立と有之、然る上は事を起し候は鳥に無相違、其策尤巧なり、とあるが如く、蘭學者の巨魁として先生を入獄せしめたことも、まことに筋褻の合はぬことであるが、先生から次第に火の手を廣げ江川などに及ばさうと云ふ魂膽から起つてゐるのであるから、愈取調が進行すると、先生を罪すべき名義は更にないのであります。無人島一件にて拘留せられたもの共は、異口同音に先生

獄とは没交渉であると答へてゐます。無量壽寺住職父子は、渡邊登と申すは、何人に候や一向不存と云ひ、山口屋金三郎は、渡邊は高名にて、其上外國の事を存候人と申事故、何れ訪ひ候様、虎一より度々咄候得共、彼是未だ面會も不仕候と云ひ、齋藤治郎兵衛は、登事は虎一すゝめにて、權家よりも無人島御開合有之候へば、此宅を訪ひ候様申候、登宅を訪ひ候折

一向其様なる事も無之、餘の咄を仕候、此人高名な人故、ムダにも不相成、顔を見徳みどに歸宅仕候、前後只一度参り候のみと申してゐる。して見れば、無人島事件に關しては證據不十分であるから、先生は冤罪から脱れねばならぬのであります。ところが今度は先生の家宅搜索から引き上げた慎機論の未定稿や缺舌或問やが重要なる問題となつて、頻に糺問があつたのであります。「私宅よりつまらぬ反故書出で、これが罪の極りと相成候、其書當正月フト思ひ出で認めかゝり候處、趣向を一ばいに認候得ば、實に御政事をも讒する極に相成候間、恐入候、一晚にて止に仕り、書捨て申候、依之十分の二計りも出來ず且書中色々御吟味の所、打忘れし程の事に御座候、半草稿なつかはの事故成書にも無之、又流傳と申にも無之、申さば罪は無之、私申張り候へば、其にも相成候へ共、無性に御不審と申廉に當時相成候、誠にをかした事に御座候、乍去私心中に無之事故一

向に苦勞には不相成候へ共、唯在上大臣の思召次第に落着仕候故、訟の言語は上へ達不申、元來讒言に有之、かくの如く相成候故、私言葉立候へば、重き役御疎忽に可相成、誠に迷惑至極の儀、唯天命にまかせる計り候と申された如く、理が非でも否應なしに先生を罪に陥さなければ、當局の威信が立たぬ譯であるから、慎機論、缺舌或問などは恰好な材料として、刀筆の吏どもに、曲解悪用されたのであります。先生も初めはお預け、若くは遠島の刑ぐらゐと覺悟されてゐましたが、悪魔の手は次第に先生の身に迫つて、遂には死刑との噂を生ずるに至りました。否噂ではない、死刑と云ふ極刑は實に先生の頭上に臨んだのであります。口書を見ると、壓制にも、先生を此極刑に陥るやう斷案してあります。

口書

三宅土佐守家來

亥四十六年

私儀如何の風聞入御聽被召出揚屋へ被遣其後御目付様御立合改揚屋入被仰付御吟味御座候。私儀土佐守家來渡邊市郎兵衛忝にて八歳の時より主人嫡子龜吉伽役相勤め其後追々致轉役八ヶ年以前辰年寄末席被申付相勤罷在候。異國船渡り候節海岸心得方の儀に付前々の御書付并に文政八年酉年被仰出候趣も有之主人領分三州田原の義者遠州大洋へ出張り候場所付私儀海岸懸り被申付於御當所右用向き相心得罷在候。右に付異國船渡來の節不調法無之様常々心配致し西洋蠻國の事情教政軍事等の儀心得居申度。御留守居松平内匠頭様與力青山儀兵衛借地町醫長英岡部内膳正様醫師小關三榮水戸様御家來幡崎鼎等は蘭學にて名高き者に付知る人に相

成。長英は主人へ致推舉出入扶持相送り追々蘭書翻譯を相頼み難讀得廉理義難解義は右三人へ承り合せ蠻國の風俗其外一通は右書中にて相心得罷在候得共一體私儀者幼年より文武の稽古相勵み右餘暇にて晝を學び華山と號し慰に認物致し候處不圖世間に名を被知候様相成當時門人等も多人數有之外々より認め物の頼み多く殊の外忙敷其上日勤の身分主人家政向取扱等に而寸暇無之候。蘭學之儀は見識淺く未だ自己の了簡を以て解譯等は致兼候。然る所去年六月阿蘭陀甲比丹内々申上候はイギリス人モリソンと申者日本漂流人七人を自國の船に乗せ江戸近海へ交易を願候心組の故申上候旨風聞に而承り候。萬一主人領分の海岸へ著船致し候義有之候節は豫め心得無之候ては難相成義と存し且右モリソン者彼國有名の者に而中華廣東の地にも數年留學致し著書の内五車韻府其外通

鑑綱目・東華錄・西域碑文・周易の抄録等有之、五車韵府者通辦の爲俗語の解譯に而、皆横文を以て傍注致有之、右出版の年を以て當時に引當相考へ候得ば、五十歳前後の者と被存候。其人と爲り英邁に而、位も高く、威權も盛に有之候旨、阿蘭陀人相話し候由、承り及び罷在候處、右モリソン漂流人を送り來り候に付、深き仔細も可有之、右之趣意を相考候へば、右モリソン者漢學にも達し候故を以て、漂流人を送候に托し、彼國の事情を訴へ、交易を願ひ候義に可有之候處、右仔細御糺問も無之、御法令通り打拂ひ被仰出候而は、御仁惠の御趣意に不相當、蠻國の者恨を結び候而は、國家の御爲めにも相成間敷と懸念心配致し、存慮の趣書面に書綴り見可申と、先尋問を請け答への積りの作意にて相認め候西洋事情の義御尋ねを蒙り奉畏候。不案内の事にては御座候得共、想像仕候丈けを申上候と申す書出に候て、相認め候書中、悉

く蠻國治亂の事を記し、教政學校の盛なる事、日本唐土の及ぶ所に而は無之、杯と書顯し、且つ日本海邊の諸島洋人の領に無之は無く、唯其國を不失者は、白爾西亞、我國而已に御座候と存じ候得ば、殊に心細き事に御座候。然るに不知者は井蛙に齊しき心持に御座候と記し、或は古今の時變に隨ひ政を立候儀は天下の通義に御座候。天地古今不變不止、太古の世日本僅かに大八洲に限り、奥州は未だ開けざるの處、追々地方誘化し、熊襲征伐の後、皇后自ら新羅を征し、其後、北越東奥の地次第に相開け、終に後世松前蝦夷に及び、皆大抵憂勤の處、威力共に舉り、終に大閤の征伐に相成り候。中葉耶蘇の邪教に懲り、規模狭小に相成り、只一國を治るに急なる故、遂に海外の侮りを請る事共、已後の變如何を不存候而は如何と書し、昔一室を治め候者、僅に鐘釜妻妾に有之候處、偶盜人到れば門を固ふし、墻を高ふし、内は妻妾に驕り、

大盜襲來り候節門牆は不越候得共、一村燔打仕候而は終に延焼に及び候は、莊子肱篋の編に云ふ譬の如くに候と存候而、鄙見を書き候。

一、ニイマンと申し近來參り候、甲比丹の話に而は、イギリス海防の嚴なる事、世界中の敵を一時に引受候とも攻る事不能由申候。是に因て外國の備へ有る事を推察仕候迄に候。

一、ニイマン逗留中、オルフと申す蘭人の申にはイギリス日本地方の群島を取候心組に候間、御用心可被爲候。火術鍛鍊ならざれば防禦は成不申、金二百兩も年々被下候はば、火術に功者なる者を選び、五六年も留越し御教授申度由申候由に候。

一、西洋は無名の軍は起し不申候。何れも正しうする事を始と致し候。已にポナバルテ厄入多を征し候時も、渡海の防と、不義の事を數件申立に致候。

是等心得可申事に候。

右の外數ヶ條認め末文に至り、權地球に及び候洋人は實に大敵と申も餘り有之候事にて、何卒此上は、御徳政と、御規模の廣大とを所祈也と相認候得共、未得意候間、別に議論を記し、慎機論と題號致し候積にて、前條にはモリソン漂流人を送り江戸近海に至り候由の儀茲に蠻國戰爭の儀を記し、かゝる顯名の士首とし護送せる事は、本國の命を領し來る事疑ふべからず、殊にモリソン唐山の學を爲し、亞細亞の人情も解し居候事なれば、極めて其人を選みたる亦意あるが如し。抑も我國は外交の嚴なる海外諸國の領知する處、其證は諸地志、又鄂羅斯クルウセンの記コロキンの記等に審也。然る上は漂流人を媒酌として交易を乞ふ事の行れざるは、固より了解して來れるならん。レザノットの舊轍を不踏事は必然なるべし。然るに朝議鄂羅斯

使節の例の如く、彼國一箇の故を以て、御國政の御變違ならざる事は、假令是より事生ずる共動かすべからざる大道なるべし。然りと雖共西洋諸國の道とする所と、我の道とする所と、理に於ては有一無二と雖、大小の分なきに非ず、是能く彼を審にする者にあらざれば、盲瞽相象の如く、一尾一脚も象は則象也、もし尾を捉り象を説かば、垂鼻長牙又何れに有やと認め、其の外今天下五大洲中亞墨利加亞弗利加亞烏斯答羅利の三洲は已に歐羅巴諸國の有と成、亞細亞一洲と雖も、僅に我國唐山百爾西而已、其三國の中西人通信せざるは唯我國と存、恐多事なれど實に杞憂に堪へず、論すべきは西人より一視せば我國は途上の遺肉の如く、餓虎渴狼の不顧を得んや。若英吉利斯交販の行はれざるは貴國永世の禁固く侵すべからざる共、我國を始め海外諸國航海の者、或は漂蕩し、或は薪水を缺、或は疾病あるもの、地方を求め

急を救はんとせん、に貴國海岸嚴備にして、航海に害あること、一國の故を以て地球諸國の害あらんには、同敷天地を載踏して類を害す、豈是を人と謂んや。貴國に於能此大道を解し、我天下に於て望所の報を聞かんと申せし時、彼が從來可疑の事實を擧て、通信すべからざる故を諭すより外あるべからず。かゝる瑣屑の論に落て、究る所彼が貪婪に名目生すべし、杯記し、又は英吉利斯の我に要むる所、蠶の蠶を逐ふが若く、必拂へば又來るべし。嗚呼天下の理勢乘除相成、物極則變、盛極則衰、古教盛隆の地皆北狄の爲に併せられざる無かと認め、或は西洋諸國の地を考ふるに、大抵北極出地七十度に起り、四十五度に終る、其間五十五度以下を多しとす。是を我に比すれば、奧蝦夷以北の地にして、人多きに非らず、土地廣きに非らず、耕も食に足らず、織も衣に不足、肉を食ひ皮を被り、勞苦に習ひ死を恐れず、後來南化北移し、

終には英達の君會出て今隆盛に及べり。然らば則土地の豊福も不可頼、人の衆多も不可喜、夫唯勤憂にある乎。凡政は據る所に立、福は安する所に生ず。今國家所據者海、所安者外患、一旦可恃者不可恃、可安者不可安して、徒に三代綏服の制、秦漢禦戎の論を以て今を論ずるものも、亦膠柱鼓琴の如し。如何となれば唐山の地たる重山複嶺、南北を界し、渺然たる砂漠、其西を圍み、大寇推舉して壓來ると雖も、一邊の地にして是に加ふるに世々皆忽にせざるの地にして、屯田守戰逸を以て勞を待、尤防易きものあり。且其徒も亦剽奸驕横のみにして、唯其利は北塞に居南征し易き耳。今我邦四周渺然、天下據る處の界にして、世々不備の處、其來る一處に限る事不能、一旦事ある時、全國の力を以てすと雖も、鞭の長け短ふして馬腹に及ばざるを恐るゝなり。況んや西海羶腥の徒、四方を明にして萬國を結び、世々擾亂の驕徒海

船火攻其長するを以て我短にあたり、海運を妨げ、不備を劫し、逸を以て勞を攻めば、諸事反戻して手を措所なかるべし。惟皆唐山滉洋恣肆の風、轉傳して高明空虛の學盛なるより終に其光明蔽障自から井蛙管見に落を不知也。況んや明末の典雅風流を尙び、兵戈日に警むれども苟も酣歌鼓舞して士氣僂蕩に陥るが如し。今在上大臣を責るも、固より執袴子弟、要路權臣を責んと欲するも、賄賂佯臣、唯有心者は儒臣の望淺うして大を措小を取、一不痛不癢の世界と成る。今夫如此ば唯束手して寇を待たんかと認め、右の通り議論を以て略ぼ海防心得方を記し候積にて、未だ稿を終り不申候處、禁忌を犯し候語有之候に付、恐入候儀と心得、其儘にて筆を止め、他見等は更に不爲仕、仕舞置候儀に有之候。且つ鳩舌或問儀は七年前より長英竝に小關三榮、幡崎鼎より追々承り置候もの、或は蘭書を引き當て考訂致し、蠻國

の様子、人物の賢否、國の廣狹、人別の多少を論じ、且つ御政事を議し候蘭人の申候話等を書き載せ、同小記は去年參向の甲比丹ニイマン説話の趣、青山因幡守様御家來、湊長安其外傳聞に付承候儀は時に書留め、或問附録の心得にて著述致し候儀にて、右書中の趣はニイマン儀、御老中様方、御若年寄様方廻勤の義、竝に御城御座敷向、西の丸炎上の節相晰し候趣等書綴り、序文も草稿致し、未だ清書も不仕下書の儘所持罷在候。

一、私儀近來土佐守隱居へ蘭學を勧め、好事の徒を集め、右書を講じ、蘭學を以て世に被知候、幡崎鼎、高野長英、小關三榮等へ深く交り、蘭科醫師を始其徒を集め、蠻國の事情を穿鑿致し、當今の御政事を批判致候由入、御聽候處、主人士佐守隱居にては無之、厄介の大叔父綱藏を勧め、茲に鼎長英等懇意に致し候儀は相違無之。私儀は未蘭學未熟の義

に付き、講釋等は出來不申、長英竝に三榮鼎等を招き、翻譯等相頼み、又は理義等承り合候儀にて、一體好事の性質に付、同交の者多く、畫門人は勿論、文雅に携はり候者は知る人多きに付、自から出入多く、外國の事情を穿鑿致候儀は、著書の通り相違無之御座候。其外御政事向批判仕候義、口外致候覺毛頭無御座候得共、前書認め置候、書中には御政事向きの儀も論じ有之候儀に付、右を以て御尋ね候而は可申譯方も無御座候。

一、浦賀洋中にて、諸國廻船を邪魔致し候而は、時に江戸困究に相成、自ら交易の道も開け可申様、其外不容易事も常に雜談同様申散らし候由、御聽に達し候趣、右者古來より人々申候事にて、古人の筆記等にも見及候義も有之、耳馴候咄に候得共、私より雜談致し候義は無之、御吟味の上御小人頭柳田綾太郎組御小人御納戸御番花井虎一義、右咄

私より承り候故一旦申上候得共、右は全く覺違の旨申上候由奉承知候。

一、奥州金華山洋中離れ島には、異國人船を繋ぎ罷在、其邊の漁夫へ金子遣し候へば、自在に通路相成候旨、同好の者に相咄し候由、御聽に達し候處、右は當四月下旬と覺へ候、花井虎一罷越、右咄私より申聞候儀有之由承り候。彌相違無之候哉、さ候へば、深川佐賀町金七店秀三郎同道致し、金華山へ參度候間、委敷様子咄聞かし、吳候様申候處、右様の儀相咄候儀は無之旨御答置候。然る處御吟味の上、花井虎一儀右の話は私より御普請役大塚政右衛門兄大塚庵へ相話候由、同人と御突合せ、御尋ね御座候處、庵儀は私とは兼て戀意に候得共、右體の話私より承り候儀は勿論、虎一へ相話候儀も無之旨申上候由。金華山洋中の義兼て話に承り及候儀有之候へ共、不取留雜說故、私より口外致し

候覺無御座候。

一、私儀無人島は、異國人船を繋ぎ居候由承り、右に付豫て渡海應接致度心底の處、去年中御代官羽倉外記様、伊豆島を御巡見之節、無人島へも御渡海被成度故、御頼み有之候に付、御同船可致心底にて主人土佐守に願立候儀も有之、來子年外記様、御目付、御目代、無人島へ渡海致し候由に付、其節は同船致し、漂流に托して、呂宋、サンドウイス、アメリカ國邊へ罷越候心組にて罷在候故、此節無量壽寺順宜渡海の連中には、不加罷在候由、御尋御座候處、右外記様御願有之候故は承り及候。其頃主人家政筋の義に付、同役共と矛盾致し候義有之、因而退役の儀相願候得共、聞届に不相成候に付、逆も聞濟には相成る間敷と相察し候得共、外記様御巡島の節、御付添申し、無人島へ渡航致し度段、其節主人在國中に付、同役共迄、願書差出し候處、年寄相勤候身分に而、右體の願

書差出候は、心得違にて可有之旨被申聞、願書差戻され申候。右の通願書の趣聞届も不相成候儀に付、目付、目代衆御越の節同船の儀固より可相叶筋に無之、漂流に托し異國へ罷越すべき坏、存じもよらざる義にて、右體の心組毛頭無御座候。

一、オロシヤ、イギリスの船印藏板所持罷在候義、御尋に御座候處、右者海岸の者共心得にも相成、且つ唐船、朝鮮船等船形紛れも致す間敷候得共、是又心得居不申候ては如何に付、右船の總圖、前書船印旗印共板行に致し主人領分海岸村々へ配置申度存じ、十ヶ年程以前と覺え候。中川忠五郎様御勘定御吟味御勤役の節御宅へ罷出御逢の義相願ひ、右板行の義主人より御老中様へ相伺方も可有之歟と存じ私心得を以て相尋ね候所、藏板に致置主人領分限り渡置候義苦じかるまじく被仰聞候に付、板行申付、主人より沙汰も有之候得共、忠五郎様相伺濟

之旨申聞候。右繪圖摺立海岸村々へ可差遣、去々年と覺候、御勘定御吟味海岸御掛川路三左衛門様宅へ罷出、御逢の相願、中川忠五郎様御勤役中相伺候。オロシヤ、イギリス船印旗印板行申付置候所、出來摺立候旨御直に申上、右繪圖二枚差上候義に而、右の通海岸御係相伺、又は御届申上置候間、不苦義と相心得罷在候義に、御座候。

一、去々酉年二月中、大鹽平八郎徒黨相企候一件の砌、私へは平八郎より度々交通有之候故、騒立候以前の事實を相辨居候は、顯然の書き物所持致し候儀之旨、風聞の趣を以て御尋有之候所。平八郎名前は兼て承及罷在候得共、面會致し候は、勿論、交通爲取替候儀は無之、去暮歟當春歟とも覺ゆ、同家中鈴木孫助儀外より貫ひ候由にて、平八郎文通相見せ候に付、一覽致し候所、趣意は、聡とは覺へず候得共、あら、かなる文體と被存、借受け暫く留め置き候所、相返し吳候様に催促申越に

付、狀箱に入れ相返し申候。然る所、私御呼び出し御吟味に相成、御組
 與力衆被遣、私宅にも有之書物類御取上げ被成、所々より参り候書通
 等御穿鑿有之候由承及。右様の文通所持致し候儀、不宜儀と存じ火
 中致候由、私方にて花井虎一儀一覽致候所、名前は不相分、平易の文體
 と見請候段申上、候由承知仕候處、右の通平八郎は知る人にも無之、文
 通爲取替候儀無之故、孫助より爲見候儀にて、騒動以前の事實承知致
 罷在候由の儀は、毛頭覺無御座候。

一、交替御寄合福原内匠様御家來齋藤治郎兵衛と知る人に相成候義
 は、去年春の頃にも候歟、沿海奇聞と申書一覽致し候處、無人島の記遺
 漏有之様に存じ、花井虎一は、好事の者に付承合候處。右治郎兵衛は
 先年御徒土方相勤候節、渡海の儀相願候義有之、地理案内の者に付、同
 人へ参り合せ可然と申、住所等書付吳候へ共、多用に付罷越不申候處、

同年四月、日不覺、右治郎兵衛私宅へ罷越、無人島の儀に付御役家より
 私へ御尋の筋有之由、渡海の儀被仰付候にも候歟と承合候間、御役人
 方より私へ御尋ね候歟、其儀は存ぜず、無人島の儀知人に問合有之候
 へ共、渡海杯被仰付候儀は、勿論無之、自分所持の書物等貸渡候而已の
 由及、挨拶、地理等承合候得共、存外不案内の様子に付望を失ひ、深く談
 話等に及不申。

治郎兵衛儀は立歸り、其後出會の義無之、然る處花井虎一より治郎兵
 衛へ申談候趣は、私儀無人島の儀に付御役家より御尋ね有之候由。
 素と治郎兵衛は渡海心願の者に付私へ便り願立等可致心底にて罷
 在候處、私よりの挨拶承り候處、心組齟齬致候旨、今般御吟味の上承知
 仕候處。其頃羽倉外記様無人島御巡見御願の義に付、彼是咄等も有
 之時節に付相混じ虎一義私より申聞候様にも承り候歟も難計奉存

候。

一、夢物語の義は、前書長英著述にて有之、同人方へ參候節爲見候に付、一覽の上他見等は遠慮致し可然旨申談候迄にて、考等致遣し候趣會て無御座候。

一、ア、ルドレイキス、ヲ、ルデンブクと申蘭書、ブラウンスゾランと申蘭人著述にて地理を記候書の由承り、小關三榮世話を以て買取り、長英に解譯承候處、イギリス人數割等悉く右の書中に有之候由、長英所望に付貸遣し候義も有之候處、夢物語に認候人數割等右書中に基き書綴り候儀と奉存候。

一、無人島へ渡海の義、船竝に渡海手當出來候得ば土佐守領分の内に、海路巧者なる船頭有之候に付歸國致候様取計可致旨申聞候、風聞之趣御尋御座候處。右體の語等一切致候覺無之。今般一件の内齋藤

治郎兵衛は前書の通り、一度面會致候儘にて、遠山半左衛門様組御徒士榮佐父本岐道平は、鐵砲細工致し、以前より懇意に有之。七八年以前と覺へ候、ドルールヒユスを唱ふる小筒を參持候間、一覽の上差戻し候儀に有之、前書秀三郎畫會席にて知る人に相成、其後同人書畫會を相催候由、出席の義頼みの爲私宅へ相越、前後兩度面會致し候儘に有之。本石町三丁目五人組店旅人宿彦兵衛幼年に付後見金次郎、常州鹿島郡鳥巢村一向宗無量壽寺順宜同人忤順道、水戸様御領分常州奈珂港村住居小從人列郷士大内要助父隱居大内清左衛門等は、一向知る人にも無御座候。

前書の趣花井虎一より其筋へ申立、又は如何の風聞入御聽、當役所へ被召出、揚屋へ被遣、御組與力衆被差遣、私宅相改め、缺舌或問、慎機論其外御取揚有之、其後御目附様御立會、御吟味罷在候。蘭書等理義相分

り候に隨ひ、蠻國強盛の様に奉存海岸の御備格別嚴重の御沙汰無之
 ては、國家の御爲めに相成間敷と存過候より、不計恐入候文勢にも至
 り候儀にて、半にて稿を止め、其儘仕舞置き、誰にも爲見候儀無之候。
 缺否或問同小記も同様、人には爲見不申候處、花井虎一罷越候砌、私家
 食事致し候内、爲待置候も無手持相見へ、同人に爲見候外餘人に爲見
 候儀一切無御座、小關三榮は自殺致し、順道并に齋藤治郎兵衛御吟味
 中病死致し、湊長安儀も先達て病死致し候段奉承知候。再應御吟味
 御座候得共、前書の外仔細差して無御座候旨申上候に付、被仰聞は、私
 儀主人領分三州田原、遠州洋中へ出張候場所にて、私儀海岸掛相心得
 罷在候に付。海防手當は勿論蠻國の事情に通じ、主人之補翼に相成
 度心底にて長英并に小關三榮、幡崎鼎と厚く交り、蘭書を學び、西洋并
 に諸國の風俗并に去年參向の甲比丹ニイマンの小説等、傳聞の儘筆

記致候分書集め、缺否或問同小記を著述致し。其の後追々蘭書の義
 理相分り候に従ひ、彼國の教政武備等行届候様存じなし、主人領分海
 岸手當等の儀、深く心配致し罷在候處、イギリス人モリソンと申者日
 本漂流の者を自國の船に乗せ、江戸近海へ送り來候旨甲比丹より内
 々申上候由の風聞及承、右モリソンは暫時唐土に留學致し、學力も有
 之、當時官祿重く、取用の人物の旨傳聞の説を事實と心得。彼の國表
 に信義を唱へ、漂民を送り來り候處、近年被仰出候通、打拂等被仰付候
 ては、後來恨みを結び、不可然旨存じ迷ひ、慎機論并に海外事情を受答
 候趣の書面に綴り、右の内には井蛙小鷄、或は盲瞽相象の譬を取り、其
 の外恐れ多き事共相認め、御政事を批判致候段、畢竟海御岸手薄にて
 は不慮の儀有之候節、國家の御爲めにも不相成儀と一途に存過ぎ候
 心底を以つて、自問自答の心得にて、右の通認め掛け候へ共。不計不

容易の文勢に流れ候に付、恐入候義と相辨へ、未だ稿を終へ不申下書の儘仕舞置き、他見爲致候義無之由は申立候得共。右始末、不憚公儀不敬の至り、重役相勤候身分、別而不届の旨御吟味を請け、無申披奉誤候。

亥七月廿四日

渡邊 登

邊 亂暴とも壓制とも申やうがありませんが、斷案を下して置いての調
華 書でありますから、どうも仕様はないのであります。八月十八日、先生
山 から椿椿山に送つた書中に、

是迄認廷にて誹謗と申事は無之、議論とあり、然るに、此間立印立原杏所より林子平ならば、蟄居のこと安心、金聖嘆の如し(死刑)と申來。もとより反故の中、讀めぬ處を私にもよませ、無理非方らしき處、口書に淨書に相成候。依之私申候には、この書初稿にて半成なるを捨候故

一句にても心に定め候處一字も無之候間、認直可仰付様願候而は如何、さなく候は、胎子の月に不満をやぶりて、是に人道をせむるに近し。御さつ度は承伏不仕候段申上候に付、疎忽失言と申に相成、末文も恐多き文勢の流れと相成候。私より一言も申上がたき様にきれいに認有之候。追て本口書に嚴否相替候御趣向にて、いづれにも上を窺ふ御手段相見候、それ故一旦は死を決、中頃よりは死はまぬかれ候事と存、まさか案事過、元來非方にて死、然るに國家を憂ふるには無相違認候故、餘波の不遜に及也。其の上初稿半成紙もしわだらけ、むだ書もあり、直し多く、元本を見ればこれは串戲など申程のもの、さすれば一等も二等もかろきもの、殊によれば亂稿讀かね候と申而も濟候程のもの、又序引ばかりにて存念は認不申、旁外の例はなきものなり。又一夕認候而忘れ候程のもの、又非方と申しても誰に向ひ申た

るには無之、又外より出たるにも無之、又餘の御疑にて、宅調にて出候もの、御勘辨も有べし。

とあります通り、無理に罪を構成しやうとしてゐるさまがありくと見えてゐます。

渡 先生が罪なくして投獄されると、藩侯友信君を始めとして先生の知人門弟ども痛心は一方ではありません。椿椿山立原杏所高久靄屋等は東奔西走して、救助の道を講じました。或は病氣出牢を計畫したり、山 牢見舞を送つたり、家族を慰めたりして、日も足らぬ有様でありました。しかし病氣出牢のことは叶ひませんでした。これは椿山の麴町一件日録の中六月十日の條に、

一、高柳兵助來、大草手筋より承り候處、此舉出牢之手配至而不宜、愼で家事を治め候方可宜、且先生多年之評判に付、今更未練が間敷事御坐

投

候而は不宜と申聞候由。極重罪にて首罪、輕くて永牢也、多分永牢之方と申聞。

一、小林へ至面會、和田來、一昨日宗安方へ參り候處、當人より快氣の趣大勢の中にて被申出候故、趣向出來兼候趣申聞候由、高柳之咄も申談、仍て牢中へ萬事今一應問合の上可相計方可然と申談。

獄

とありますし、又先生は之に對して、
出窖のこと被仰下誠以難有仕合候。乍去未御疑ひ霽不申候間、世間様子相直り不申、殊私之罪は上之御恥にて、矢張上御疑ひを被爲受候義に相當り申候。依之僅にこらへ性無之みだりに願立致、他家へ御預にても相成候得ば、他家様は迷惑上も一段の御恥辱にて、可相成は今冬也、來春也、御裁許迄は此室中へ罷在申候。それとも一體御疑もゆるみ候上は世評次第被仰下候は、此方にて取計願可申候。

とありて、其好意を辭退されて居ります。遂に上野寛永寺にゐます法親王の御聲が、りについて運動をもしました。麴町一件日録の中に六月十四日の條に、

渡 邊 華 山

一、沼田來、上野御聲掛りのこと問合、御赦の節多くあり、多分吟味中はむだなるべし、御聲掛を願ふは上野にて宗門の執頭公邊の執頭兩人あり。其公邊の執頭(當時龍王院と云よし)萬事執行のことなれば、又山内の極も申べしと云々。

山 同十五日の條に、

叡山宮様御聲掛一條は、宮様御用人本馬相模守より願入候積之由、右相模守奥方は田原侯兩敬本多[]より被嫁候由、本多侯隠居より相頼候手續之由、

同十七日の條に、

投

一、高柳來、宮様御聲掛義承合候處、奉行所取上げ無之者也、又上野鍵之助方問合候處、御聲掛り、義執頭取計、御用番へ使僧元は宿坊より申立之手續也、田原公宿坊は涼泉院之由、尤夫よりも内々申出候様子也、又度々之使僧參り候方宜、是は執頭取計にて何ヶ度も御使立候事之由、隨分宜敷也。

とあります。其他いろく、と傳手^{つて}を以て運動に着手したことは、麴町一件日録の六月十四日の條に、

獄

一、平藏來、本郷[]奉公せし人尼となりて其屋敷にあり。其人の娘分の人を薩州へ奉公の世話せしことあり。其縁を以頼入候由、此尼の主人方へは越前殿、久世殿も參られるよし、兩君願吳候由。
一、本郷にて平山へ面會、蓮池畔にて長話に及ぶ。甲州出の人兩御番也、麴町住水府の内命ありて召出されし人、伏見平左衛門と云。此人

無二の懇意なる御祐筆は桑山六左衛門殿と云よし、頼入置たりとぞ。とあります。知人門弟の手分して運動奔走したことは椿山の書翰に詳しく見えてゐます。しかし如何なる運動も手段も先生を救ふことは出来ませんでした。蕭條たる秋の夕、草葉のうちにすだく蟲の音を聞いては、我が身の上に比べて、先生は、

鈴蟲はおのが草葉に音を啼きて

筱のうちいきく身こそ悲しき

と詠じ、死刑の噂を聞いては、

梓弓やたけ心の武夫も

親にひかれて迷ふ死出かな

と、浩歎されました。幕府では斬罪と云ふ極刑案に一度は極つたが、實際罪のない先生を無理往生に罪ある如く構成したのでありますから、

それも決し兼ねてゐました。しかし口書の末にあるが如く「不憚公儀不敬の至り、重役相勤候身分、別而不届」と斷案してゐるのでありますから、處刑の輕からぬことは見えてゐます。

知友門弟が心血を絞つて、足を空様に奔走しての運動も功がなかつたところへ、敢然として奮ひ起つて、先生の爲に助命運動をしたのは、先生の師なる、老齡七十歳の松崎慊堂翁でありました。翁は肥後の人でありましたが、掛川藩の教官をして、學殖と德行とを以て聞えた高士であります。翁は先生の罪なくして縲綹の辱を受け、しかも口書の末段に重く刑せらるべき文意のあるを見て、慷慨措く能はず、病中、筆を呵して、關老水野越前守忠邦に上書したのであります。此書には、先づ第一に先生の人となりを詳に論じてゐます。

登は從來佐藤捨藏(一齋)社中に御坐候處、二十年來、私方にも師賓の禮

を執申候に付私も無底意申談候に事に御座候。先其人の大概を申せば、衣服にも上着下着揃候は一襲も無之、相見平日他行の上着を禮服之下着に相用年始などに參り候にも熨斗目之下着不揃之常用衣物を相重十年前用人の時より其通只今家老に而も其通に御座候。御考合候は、可相分此其清廉之一端に而萬事御推察可被下。偕又其人謙讓にして誰人に對候而も一向家老風など少しも不顯人の美事は一言一行たりとも必感心籍記仕候。其人生來好繪畫候得ども世の畫人と違ひ畫書畫論など多分研究仕候より隨分博覽之處も有之候間敬慕納交之人も餘計有之誰に而も其人を感心せぬもの無之第一は私存知候二拾年以來母親に孝養を盡し私方へ參り候にも晩刻に相成候得ば是非急ぎ辭去申候を同座之もの強て抑留仕候得共入夜候而は老母案思申候に付乍殘念と斷罷歸り候。偶其宅に參候

節も心付候に、老母に事へ候様子何となく感心仕候事御座候。總て一點之文飾も無之、此事往來交游之談大概日録に御座候。御存知も可有之、五郎と申弟一人御座候。貳十歳計之若者に御座候を、自己の子三四人有之候得共、彼を順養子に致し、母の心を安んじ申候積之由。然る處去年春頃か疫邪に而死去候以來、母の哀傷を悲み、猶更萬事心を付孝養致候様子、誰人も見受申候よし、私にも物語など仕候。

それより藩主への忠節、凶荒の動勞等を挙げまして、今度の疑獄に及び其の讒言に出でたるべきを論じ、唐律明律に照らし、其無罪なるを説いて、言々痛切を極めておます。此慊堂翁の忠言は最も功を奏したものと見えまして、十二月十九日、出獄となり、藩地田原へ蟄居を命ぜられました。

申渡之書

三宅土佐守家來

渡邊登

年四十七歲

其方儀、主人領分三州田原者、遠州大洋へ出張候場所にて、其方海岸掛心得罷在候に付。海防手當は勿論、蠻國之事情に通し、主人の輔翼に相成度心底にて、高野長英、小關三榮、幡崎鼎等と厚く交り。蘭書を學び、西洋諸國之風俗并に去年參向之甲比丹ニイマンの說話等傳聞之、まゝ筆記致置候分書き集め。駄舌或問、同小記を著述致し、其上追々蘭書之見識相分るに隨ひ、國々の教政軍備等行届候様に存じ。主人領分海岸手當之義、深く心配致し罷在候處。イギリス人モリソンなる者、日本漂流之者を自國の船へ乗せ、江戸近海へ送り來る旨、甲比丹之申上候風聞及承候様。モリソン者素と唐土に留學致し力も有之、

當官祿も重く取用ひ候人物の旨傳聞之説を事實と心得。彼國表に信義を唱へ、漂民を送り來り候所、近來被仰出候打拂ひ等被仰出候而は、後來怨を結び不可然旨存じ迷ひ。慎機論并に海外事情等を請答の趣きに書き綴り有之、其中に井蛙鶴鷄或は盲瞽相象等、其外比喻之語を以て、御政治を批判致し候段、海岸の御手當薄く候而は、不慮之義有之候時、國家之御爲に不相成候と、一途に存じ過候心底より、自問自答之心得にて、右之通認置候得共。不計も不容易之文勢に流れ候に心付き、恐入候義を相辨へ、未だ稿を終り不申下書の儘にて仕舞置他見爲致候儀更に無之由申立候得共。右始末重役を相勤め候身分別而不届に付、主人家來へ引渡、於在所塾居。

天保十己亥十二月十九日

是より先き、小關三榮は、先生が入獄されるを聞くと、之は先日先生が

蘭書の切支丹略傳を三榮に讀ませ、之を翻譯されて、もはや其譯が出来上らうとしてゐるのを思ひ出し、國禁の書に依りて、先生は拘禁されたのであらう、華山先生に罪はない、拙者が自首して先生を救はうと、既に法廷に出かけようと思いましたが、いや拙者は國禁を犯し、主家に累を及し、磔はりつけや死刑の耻辱を受けるよりは、潔よく自殺をしよう、其晩自殺をしました。

高野長英は獄中で蠻社遭厄小記を記述し、又鳥の鳴音の一篇を著しましたが、とうとう終身禁錮の刑に處せられました。すると偶々獄舎から失火して囚徒が解放されました。そこで長英は其儘出奔し、姿を變へ、江戸市中に匿れてゐましたが、翌年冬竊に江戸を出發して、故郷に歸りまして、老母を省し、又江戸に歸り、それから尾張の名古屋に匿れ、伊豫の宇和島に居ること三年、又江戸に歸り、鈴木春山の家に寓し、高柳柳

之助と改稱し、硝石精で面貌を焼きまして、其面相を變へてゐました。其後澤三伯とも改稱して著譯に従事してゐましたが、弘化三年鈴木春山歿後に其宅に住みました。すると、三兵ダキチーキと云ふ兵術書を薩摩侯の爲に譯述したことから、露顯しまして、嘉永三年十月晦日其家を圍みました捕卒を斬つて自殺しました。享年は四十七歳でありました。

鳥居が坦庵等をも連累として陥れやうとしたのは、先生の辯論に此に及ばなかつたので、遂に無效に歸したのであります。

十六 幽居

天下の渡邊華山先生は、再び三州田原の渡邊華山となつて、掌大の小天地に、蟄伏しなければなりません。思へば先生の運命は數奇

でありました。少年時代より辛酸なる生活をつゞけて、不斷の向上心を以て世路の風波を凌ぎ凌いで、漸く雷名を天下に馳せるやうになると、端なく、大打撃を蒙つて、急轉直下、光明の生活から暗黒な生活に陥らなければなりません。しかも先生は絶えて私情に囚はれず、公明正大の見地に立つて、國家の爲に働かれたのであります。先見の明、非凡の識が偶、累をなして、先生をして恢復の出來ぬ否運を甘じて受けねばならぬ境遇に至らしめたのであります。

僅に出獄を得た先生も嚴重なる藩の監禁の下で、些しの自由さへもありませんでした。硯や墨さへも渡されません、夜晝ともに番をつけられてゐました。それ故松崎謙堂翁にも面のあたり感謝の意離別の情を致すことが出來ず、僅に書を以て厚く其芳情を謝しまして、天保十一年正月十三日、檻輿江戸を發し、春とは云へど、唯名ばかりの、寒風浙瀝と

幽

吹き荒む東海道の長亭短驛を日の目も見ずに、田原へ向はれました。其駕籠は囚人の乗る錠付物で、兩便さへも其内で用をたすと云ふほど、厳しいものであります。箱根八里を越した時は大風雪で、先生は下痢にかゝられました。掛川驛の泊りでは遂に絶倒されて、戸塚隆伯の診断を受け、一日滞在して、二十日、田原に着されましたが、依然として厳しい警護の下でしたから、十分の養生も出來ず、斯くて二月十六日、初めて居宅を賜はつて、此に一家久し振で團樂の生活をなされました。先生の老母を初め、妻子も皆江戸生活をしてゐたのですが、計らずも不慮のことから此地で田園生活をする事になつたのです。定めし感慨無量であつたであらうませう。

始めて居宅を賜はつて、此で暫くの間保養して入獄以來の疲勞は日ましに恢復しましたが、獄中から病まれました疥癬は中々治りません

—— 渡 邊 華 山 ——

ので、之には先生も弱つて居られました。先生の居宅は池原と云ふ所で、曾て大藏永常が砂糖製造に従事した地であります。あたりは藪や樹が茂つて淋しい處であります。恐く今日の光景と其當時の状態とは大差がなからうと思はれます。此で罪なくして配所の月を見ながら、有爲の材を抱いて、埋木とならうとする先生の日常生活は、書を読み、書を描き、知友村人と談笑されることでありました。論語は一番愛讀されたやうであります。守困日歴と云ふ幽居中の日記中にも、終日讀論語、伊東鳳山來對讀などの記事が見えてゐます。しかし先生の貧苦は依然として渝りませんのみならず、藩地へ蟄居されてから殊に窮迫されてゐました。十一月三日椿椿山への手束にも、

一、岩槻藩醫小野氏、岳武公、支那岳飛のこと、像を友人藤村氏を介し望みのよし、武穆像は有之、揮灑の義は承、其上阿堵物、金のこと、忽ち敬じ、

—— 幽 居 ——

再び收り難く、兎に角絹來次第認め差上可申候、尤も心遣の處には無之由、唯此義のみ也。されども足下と云ひ、藤村と云ひ、何もかも宜敷願上候。薄謝等の事、渴、騏の水に趨る如く、潦、沼、清濁は更に不選、一時快を取り候のみ。

一、僕窮迫の事御聞及赤面の至りに候。景色は先日半香(福田)より何か申上げ候様子、定めて御承知、香申すには存外案事候より宜敷と喜び候間、其通と申上候、御安心可被下。此間半香、綠介より阿堵三圓持參の所へ、尊兄三圓、春色、俄來、春已來、借賃申譯、生面を開き、誠に難有候。困人の困する固よりの事、困卦の入、幽谷、苦、株木、苦、蒺藜、譬のしりくされ候とも動く不能、又動く可からず。

然れば根本心内固動かすべからざる地に候得共、既に七十の慈親を奉養致さんとするには、寂寞杜門可仕も、扱は心に不安、此兩端に相互

候、義如何と申すに、僅か平生疎漫浮躁より、親に危険の地を踏せ、父祖の墓を去らしめ、骨肉に背むかせ、交友に別れ、僻遠寂寥の地に移り、皆其樂む所安ずる所を捨て、荒山滄海、漁翁田婦と相交、麥を磨し、豆を打し、勞多く、樂少く、年將古稀、餘影幾回も無之、僅か奉養に相逼り候處、御察可被下。依之内々友人に展轉親洽致、隣婆舊僕の往來を謀り、日より夕に及び、笑談和合日を送り候故、面に笑を買ひ候は、皆背に衣を典し、守城必ず久しかるべからざるを恐懼仕候。是則僕が二岐に互り痛苦仕候處に御座候。依之此地知己の者僅に四五輩も有之候得共、唯僕を知るのみにして、助る不能もの多し、僕を知り助くる力有之も必ず久きに不耐、又一旦餘りあるもの久きに不耐れば、又助くるに益無之。又僅か手を知る者あり、多くは利に走る者なり。利に走る者は、虚稱して名を賣り、利を取る、是尤可懼の甚しき者。名なければ利

なく、名あれば懼あり、又其二岐に互り、愈幽谷に入り、蕨藜に苦む。とあり、八月三十日の椿山宛の書面にも、

一、此間申上候、顯齋(平井)より先づ五兩參り、これを七月中六兩借に入れた、それ計り故、月計丸の穴の處、尊君頂戴にて、今日迄來候。當月は當無之候得共、半香九月來と申事故、これにて大獵の心得、御案事被下間敷、貧を稱するは士之耻、況や主人有之身分、決して不致事なれども、尊兄折入御咄の事故に申上候。さりとして、大本之憂は無之、清談世を渡る迄の事なり。

と見え、日歴の中にも
七月十四日、

一、春山(鈴木)憐子窮、以阿塔二兩贈。蓋拙畫潤筆、乃托此阿塔、雪氏還生田氏。

一、雪氏又借阿堵三丸送予、蓋又與春山議云、以之償責、未清。

(春山予が窮を憐み阿堵三兩を以て贈る、蓋し拙畫の潤筆なり、乃ち此阿堵を雪氏に托して生田氏に還す。

雪氏又阿堵三丸を借りて予に送る、蓋し又春山と議すと云ふ、之を以て債を償ふも未だ清まず)

邊とありますが如く、非常に窮迫して居られました。けれど先生は達人華であり、彼の天命を樂んで又奚ぞ疑はんの境にある高士であります。此不平此窮苦の間に處しても、

嗚呼、遂事は不足説、此節先不快も全快の狀に相成、日に斗室に兀坐致し、鶴林玉露の唐子西詩云々の文の如き境界、又彭澤陶淵明のことの昨非益了解致候。其上孟子の三樂(父母俱に存し、兄弟故なし、一の樂なり、仰いで天に愧ぢず、俯して人に忤ぢず、二の樂なり、天下の英才

を得て之、教育する三の樂なり)は無之候得共、慈親を奉養致、妻子無故、又尊兄の如き同好の益友を得、其樂亦不可言、此樂有之貧中にも不足無之候。(橋山への書)と云ひ、

一、僕が此疎懶放心、散漫細事に不忍、此故御家法無之、自然雜費多人と比し難し。此地に移り試み候に、大體一年十八、九、二十圓も入用あるべし。昔日に較すれば、四五分の一なり。言ふに足らざる如くなれども、今の分に比すれば十にして二三を補ふに不足、大抵吾藩の中小姓位の處にして寸地なし。身も亦事に不馴、俗に不熟、加ふるに禁固往來なく、是れ身の困する所以、然れども、昔日の飲食に苦み、金事に苦むに較すれば、道は則ち亨る、君子進徳の地なるべし。一、依之閑を不求、身閑也。静を不求、心静也。閑静は書畫の生ずる地、

山、静にして、草木生、人静にして、思慮出、此畫なるもの人に、作す、天に背かぬ様に出来候者、知る人は知るべし。これを以て、其知者とかへ候者、願欲する所の者、可得候歟、何事も自ら致すより、外有之間敷、其上は天命に御座候。無左候は、い、心不安と決定に御座候、人生得霞烟の如く、不足論候。

三〇〇

と云つて達観して居られました。

此間の貧苦を助ける唯一の道は畫でありました。家の貧なるを救はんが爲に學ばれた畫技は、又此に於ても大に役に立つたのであります。天保十二年の初春、妹のおもとに與へた書中にも、

一、内にかき置候繪を賣り捌き度候。これはひたすら孝養のため致候。それにて日々の魚の料、寒の凌ぎ致度、心願也。

とあります如く、先生は閑地に居て、一つは貧を助ける爲め、又一つは、自

幽

己を慰むる爲めに畫事に親まれました。恐くは先生の生涯を通じて此幽居時代程の閑境はなかつたでせう。同じ天保十二年の初春(正月三日)前の妹宛と同封妹婿岩本茂兵衛へあてた書中に、

此地日々北西風烈しく、竹藪日夜鳴り騒ぎ、春のけしきは更になく候へ共、江戸の物入多く、いかに年を超候事と前夜より胸ふさがり、其上内外晝夜忙しく、剩へソレ火事、ソレ客、ソレ外勤などとバタクサ年暮れ、翌元日より暗き内より駕籠にて江戸中を乗まはし、年禮に半月は暮れて仕舞候得者、又々舊年の仕のこし、其年の事共打おこり、平日の繁勤となりかはり、内もそれに準じて年禮客日々入かはり、夢の如く世を渡り候處、此節は打かはり、母事天下様にも、殿様にも、何もかも一人にて、拙者妻かつ、長女(此時十六)は母一人を敬ひ奉り、立(長男十歳)諧(次男七歳)は御伽を致し、一家和睦、折にはもと仕ひし男共、又此地に

居

て仕候女ども入かはり機嫌聞き、大にまぎれ候。(中略)拙者は四海廣しと雖も、居所なき罪人なり。されど天下太平の民の中を放れず、公儀の御恩澤に浴し、産みおとせし母の手元におりて、孝養を盡され、家内小供もよく母の機嫌をとり、何一つ心に不足なき身と相成候得者、自然母も家内も安心、毎日難有喜び世渡り、これ迄母も小言や不足を申候へ共、此地にまいり何も左様の事は無之、まめしく喜びつゝ、此春を迎へ、今年も親子睦まじく暮し候はんと大樂みに候。

山 華 邊 渡

とありまして、先生の境涯は従前の繁忙と比べて心事俱に平和でありました。貧苦と云ふ大敵はありましたが、先生は閑境に任せて畫事に耽り、家計を助くることに一意つとめてゐられました。

十七 畫家としての先生

田原の幽居は、寧ろ畫家としての先生に取つて幸福でありました。先生の名畫は多く此際に出來たのであります。草蟲帖にしても、ヒボクラテスの像にしても、于公高門圖にしても、田園雜興圖、雁門風雨圖、海錯圖、其他種々の畫が先生の苦心に依つて描かれました。田原の幽居がなかつたなら、先生の畫は今日現存するほど澤山は残らなかつたであらうと思はれます。畫は先生の生命でありました。畫がなくとも、先覺者として、先憂者として、國家の爲に盡された先生の事蹟は、永遠に傳はりますが、更に南畫の大家と云ふことに依り、先生は畫史中の人物として千載に生きられるのであります。先生曾て鈴木春山に書を與へて、

生先のてしと家畫

一體僕事性來疎懶の上、幼少より畫に志すに死を以てし、他事不顧處、父の大病に逢ひ、又君の大義に逢ひ、因循逶迤及今日候、其實は抱二心候にて罪莫大焉候。今天下畫の眞面目を得るもの絶えて無之、我朝自在昔畫道の正を見候もの無之、我今死候時此道雲霧に陥り候。これに僕が眞色に候。唯一人僕を憐み候もの無之、君臣父子の難に遭ひ、萌蘖を摘し、終に庭隅一曲の槁木と爲り候義憂苦に不堪候。

—— 山 華 邊 渡 ——
 と、其所感を述べられてゐますが如く、畫道の正を以て自ら任じて居られたのであります。一體南畫は關西地方に盛んで、九州に田能村竹田京攝の間に蕪村・大雅堂があつて、南畫界に馳騁してゐましたが、關東には、南畫の純粹なものがありませんでした。谷文晁は南北を合せて一家とした人でありまして、南畫の正宗ではありません。先生に至りて始めて關東の南畫が開けたのであります。先生は山水に於ては清の

—— 生先のてしと家畫 ——
 王石谷を推し、花卉に於ては清の惲南田に私淑されて居りました。王石谷、名は暈、石谷は其字であります。王鑑の門に入り、王時敏・王鑑と併せて江左の三王と稱せられ、近代の大家と云はれた人であります。惲南田、名は壽平、字は正叔、南田は其號であります。初めは山水畫をやつてゐましたが、王石谷の山水を見て、到底其右に出づる能はざるを思ひ、山水を棄て花卉を畫きました。北宋の徐崇嗣が創めた沒骨法を祖述して、更に純沒骨法を用ひて、寫生の正流と稱せられました。先生は此二人を推重しましたが、決して其範圍内に踞踏したのでありません。元明の諸畫に遡つたばかりでなく、狩野・土佐の諸流をも研め、洋畫にも得る所ありて、別に新意を開かれてゐます。殊に先生の畫に就いて觀るべきは、其人格の反映で、自ら士大夫の畫であつて、氣品の高かつたこととであります。先生曾て曰く、

未だ筆を落さざる時は太極の如し、物に感じて兩儀生ず。此時自ら真空を要す。若し紙墨あり筆あり丹青あるを知らば、則ち真空に非ず。況んや古人あり今人あるものをや。感じて手を行るものは氣の傳はるなり。氣一に行はれて二に塞りて回頭すべからず、氣は水の如く奔流すべきもの、塞がるは氣に非ず。

邊と、即ち神來感興を説かれたのであります。紙墨と筆と丹青とを離れ、古人と今人となく、感來り興到り、我が性靈は凝つて、融然として畫となる。まして名と利となどがあらうか。先生の畫が清新にして俊拔なるは此に在ります。紅塵の風、銅臭の氣あるものとは、固より歳を同うして語るべきものではありません。

氣韻生動は支那の謝赫の六法中の第一でありまして、古來東洋畫の生命とする所であります。先生は之に就いて斯う云つて居られます。

扱氣と申すは、太極一元の氣、程子の所謂造化不窮の生氣、法言に云氣也者所適善惡之氣也歟。然れば善に適けば善、惡に適けば惡なるもの。こゝに云ふ氣韻の氣は、惡と小と、殺とに不適、大と善と生との氣を指す也。韻と申すは聲の集り、音の和諧致候義にて衆音を指す也。(略)扱氣と申すは天地萬物生々の氣にて單義也、韻は音の私諧致候事にて衆音を合して言ふ義也。右故に氣と云ふは筆の氣、墨の氣、色の氣と一つ一つの生氣にて、韻と云ふは、其筆墨色の衆生氣力運動するを韻と申候。氣韻生動を分けて申せば、氣韻は本旨、生動は注脚、生字は氣にかゝり、動字は韻にかゝり申候。

猶其註解と見るべきは、筆もなく墨もなくしては、紙ばかりなれば、そこで筆にて形をなし、墨にて陰陽向背を隅どりて、曲直便斜が見る様にわかる故、これを人は畫

といふべし。されども形備り、影日向あれども、作り花でも、模様でも、其位の事はあるなり。こゝに其筆墨のあとに氣韻、筆墨の經營格構に風趣がなければ、我は又これを筆墨とは申さぬなり。韻といふても其韻に俗韻もあり、雅韻もあり、そこで瀟洒の風流より出候はねば、韻とは我は不申也。變を盡したる奇ならざれば、我は趣とは申さざるなり。

—— 渡 邊 華 山 ——
 との説であります。先生の門人中、椿椿山は花卉に長じ、福田半香は山水に長じてゐましたから、先生は各々其長所を發揮するやうに獎勵されました。椿山、名は弼、通稱は忠太、もと金子金陵の門人、先生とは同門でありましたが、先生に師事して、後年非常に盡されました。此他に山本琴谷、岡本秋暉等があります。高久靄厓は文晁門から出て、南宗文人畫の名家で、關東南畫の興隆に與かつて力ありましたが、又先生より獲

る所が多かつたのであります。水戸の南畫家として名聲藉甚なる立原杏所も益を先生に得たのは少々でありませぬ。先生曾て文人畫家の不始末不行跡を嘆じて、

夫には此地(田原)に參、朝川善庵養子なる恭太郎と申者話に、詩佛(大窪五山)菊池(寫山)文晁(其社の内うらの事承り驚入、又臺嶺(勾田)妻の始末、先聖賢を假りて、人倫壞廢の極り、獸畜同様かゝるべしとは不知、久敷風塵の中に交り、其汚に不染事、必竟愚者の一得と存候。

と云はれて居ります。先生の如きは皓々たること鶴の如しであります。でありますから先生と金蘭の交りをした椿山の如きも、親には孝、師には厚く、温厚篤實の人でありましたし、先生と交りの深かつた人達は孰れも人として、立派な人達でありました。斯る人達の中心であつた先生の畫が氣品のすぐれてゐたことは又當然ではありませぬか。

小品ではありますが、田原幽居中の一傑作の草蟲帖に就いて、椿山に與へた書を見ますと、興味の油然と湧くを禁じません。之は椿山の草蟲帖に倣つて、先生も書畫二十四葉を作られたものであります。

然らば御約の草蟲書畫共二十四葉出來差出候。扱能き出來と申ものは無之候得共、實尊兄の草蟲に被壓甚無意之作、殊書など猶更愧入候、宜敷御申譯可被下候。始よりとても妙は不及せめて眞になりと被存、誤多御座候。

一、先畫の封をきらぬ前にとくと御考、私いか、認候哉と御思惟、こゝでもあらうと、一枚々々に題を見て、内を御披き可被下候。人の居る處にては御無用、御獨見を願ふ所なり。先日被仰越候末、忤にも見せず、獨樂終に出しおくれとあり。これ私の知己の言葉うれしく、わすれ不申候。樂を同する人、天下幾人かあるや、天地廣しとも、唯足下を

尙て、餘人は見不申候。それ故一所にても心に叶ひ候時は、足下を渴望かぎりなし。

- | | | |
|-------|-------|-------|
| 越瓜拒斧圖 | 竹枝窠幕圖 | 晴池嬌龜圖 |
| 古柳馬蛸圖 | 洗手露蛭圖 | 筐桑夜蠶圖 |
| 秋草金鐘圖 | 猪牙絡緯圖 | 螿籃喧蠅圖 |
| 塞塘曝龜圖 | 紫茄黃蜂圖 | 荷葉游魚圖 |

此題を御一覽可被下候。

滿腔翫牘の氣を收めて、心織筆耕の畫技に親んでゐた先生は、永く悠悠たる天地に翱翔するを得たでありませうか。或は秋夜、僕婢老婆の爲に心字の講釋したり、或は月明の夕、獨り南圃に徘徊したり、時には庭園に鋏を取り、時には作詩の興に耽り、夜靜に訪ふ人なき時は、寂寥の感殊に深く、偶、藩士の茶具を携へて來れる時、煎茶十七八碗を喫して、先近

來の快事此位之事」と自ら嘲けられて、畫筆を執る以外に、會心の友と閑談する以外に、悶々の情を遣りて、一意子として夫として親として、割合に平和の生活を送られてゐました先生に、驚天動地の悲劇が突如起らうとは誰しも思ひがけなかつたことでした。呪ひの魔は、先生を翻弄せずんば已まなかつたのであります。

十八 最期

多事多難であつた先生の一生は、遂に無事安樂で終りませんでした。「まめ／＼しく喜びつゝ、此春を迎へ、今年も親子睦まじく暮し候はんと大樂みに候」と豫期せられた天保十二年が、悲惨であらうとは、實に思ひがけのないことでした。

江戸に於ての先生は天下の士でありましたが、田原幽居の先生は田

原の藩士でありました。どこにも人の美を成すを樂はぬ猜忌心の深い人々があります。先生は一たび藩老の席に列つて、公明正大の政を乗られました、破邪顯正の實を擧げられました。それが爲め藩中一派の人は屏息してゐましたが、名聲の隆い天下の士渡邊華山先生をどうともすることが出来ません。然るに先生が幕府の嫌疑を蒙つて、一敗地に塗れられましたから、時こそ來れと、藩中一派の人は喜び合つたのであります。田原幽居後も、在藩の或人々と在江戸の或人々とは氣脈を通じて、先生の舉動を窺つてゐたのであります。江戸に在つた天下の士なる先生は藩中の或人々では動かされません。しかし田原幽居後の先生は云はゞ籠に入れられた鶴のやうなものです。其活殺擒縱は藩中の或人々の自由になります。今や先生の身は閑雲野鶴でなくして、人に切りさいなまれる魚肉でありました。

恰も此頃誰云ふとなく、斯う云ふ噂が立ちました。幕府は田原藩主三宅土佐守康直候を奏者番に任じやうとの意もあつたが、家老の渡邊登が重い罪人となつたので、沙汰止みとなつたと云ふものであります。此風説は藩中一派の人が先生に向つて放つた第一箭でありました。先生の幽居には藩中の志士眞木、村上、鈴木等の往來が絶えませんが、書を講じ、時務を論じ、風流を談じて、先生は依然重きをなしてゐました。一派の人は之を快からず、又嫉ましく見てゐたのであります。時に偶、先生の門人福田半香は先生の窮を救はんが爲めに江戸で書畫會を開く計畫をしてゐましたが、事あれかしと待ち設けたる人々に取りては絶好機會でありました。第二の征矢は此徒に依つて眞正面から先生に向つて放たれたのであります。在藩の一派は在府の一派に此事を誇大に報告し、華山は謹慎中をも憚らず、盛に世人と交通し、又江戸の門

人や有志の徒と消息を通じてゐる、今に再度の御咎を蒙つて累を藩侯に及すであらう、と云ふ旨を云ひ送つたのであります。在府の一派は一策を案じ、先生の親戚で小寺某と云ふ愚直で理義に暗いものを嚇して云ふには、どうもはや渡邊氏にも困つたものである。上を憚らぬ不敵の所行が、はや幕吏にも聞えたさうで、近々又もや御咎を蒙ることになるさうだ。渡邊氏にも似合はぬとだ。と、まことしやかに告げました。小寺某は一杯食はさるとは知らず、慌てふためいて之を田原にある親戚雪吹伊織に申送りました。そこで伊織から此事を先生の耳に聞え入れました。若し先生が江戸にゐたならば先生の耳目となる人は多うございますから、其等の虚實は直に明瞭になります。何しでも江戸とは關山百里を隔てた偏土の田原でありますから、どうともすることが出来ません。深く責任を自覺する先生は、此で直に覺悟されたので

あります。

先生は少年時代から物に動ぜぬ風がありました。所謂大勇の人であつたのです。或時夏日、藩主の宴に侍してゐましたところ、折しも一天かき曇つて大雷雨となりました。忽ち天地も崩れよとばかりの落雷に、坐中の人はあつとばかり、手にした箸を投げる、口に近づけた盃を擲げ出す、いやはや生きた空はありませんでした。其中に獨り先生だけは平常と異らず、さも愉快さうに、懷から小冊子を取り出し、一坐の周章狼狽のさまを寫生し、滑稽の材料を收められたと云ふことです。此の如く物に周章せず静に考慮し、安じて天命に従ふ先生でありましたから、愈、我事畢ると自覺されたのも、深く熟慮された結果であります。

殿が今日迄役に付かれないのは、家老たる某が罪人になつて、今日迄おめく、生き存らへてゐると云ふのが一つの原因でもあらう。半香

主催の書畫會から再び御咎を受けるやうになれば又どのやうな難儀が殿の御身に落ち来るやらも知れぬ。忠ならんとして忠ならず、孝ならんとして孝ならず。嗚呼、此身がいつまで生きたところで、國家に何の益もなければ、死んで殿に御迷惑のかゝらぬやうにするが、寧ろ優つてゐるであらう。

先生は此見地から、遂に一身を殺して、藩侯の累を除かうと決心されたのであります。しかし思へば斷腸の種であります。先生が日夕忘れ得ない老母、榮女は今年七十の高齡で、餘命幾くもありません。我が亡きあとは三十六歳の妻、たか子が、十六の長女かつ、十歳の長子立(一學)七歳の次子譜(小華)を育て、老姑に事へてゆかなければなりません。先生の家は窮骨に徹してゐるのであります。あれやこれやを考へると、誰にも訴へることの出來ぬ先生の心中は、どんなであつたでありま

せうか。

三一八

天保十二年十月十日、秋も閑けて庭にすだく蟲の音も憐れに聞ゆる夜、先生は愈、自殺を決行しやうとなされました。先生は曾て椿山に手紙を寄せて、人間は老少不定であるから、いつ死ぬか分らぬ。死んだら不忠不孝渡邊登墓と墓表に書いてくれ、此事は半香にも話して置いた邊との旨を云ひやられたことがあります。不忠不孝の賛辭は先生常に華念頭にあつたのであります。そこで愈、自殺を覺悟された時も自ら不忠不孝渡邊登と書かれました。しかし先生自らは不忠不孝と稱せられましたが、事實は純忠純孝であつたのであります。

長子立に宛ては、

餓死するとも二君に仕ふ可からず。

御祖母様御存中は、何卒御機嫌克孝行を盡し可申候。其方母不

幸のもの、又孝行盡可申候、

十月十日

不忠不孝之父

登

渡邊立どの

最との遺書を認められました。餓死するとも云々の一句は、千言萬語に優つて、先生の心血は此に凝つて居ります。祖母と母とへの孝養をすゝめたところ、これ亦先生の眞骨頂であります。此遺書に對して何人か涙の落下するを覺えぬものがありませうか。岡崎の中山氏の養子となつた實弟助右衛門へは、

拙者事不慎にて、上へ御苦勞相掛け候て、恐入候間、今般自殺致候。御母様へ對し申譯無之、不忠不孝の名後世に残り、何とも其許にも申譯無之、嗚かし後に御困難可被成候間、必死御救申上様頼申候。茂兵衛

三一九

喜太郎などへも宜敷、此様な書は涙のたね故略し申候、頓首。

十月十日

助右衛門殿

と、老母のことを頼まれました。猶先生の門人で水戸藩に仕へた金子武四郎と椿山とへ遺書を書き置かれました。椿山宛のものは次の如邊しです。

山 華 一筆啓上仕候。私事老母優養仕度より誤り、半香義會に感じ、三月分迄認跡は二半に相成置候處、追々此節風聞無實の事多く、必ず災至り可申候。然る上は主人安危にもかゝはり候間、今般自殺仕候。右私政事をも批判しながら不愼の儀と申所に落可申候。必竟惰慢不願より言行一致不仕の災に無相違候。是天に非ず自取所に無相違候。然れば今日の勢ひにては老母始め妻子に非常の困苦は勿論、主

人定めて一通にては相濟申間敷哉、然れば右の通相定候。定而天下物笑惡評も鼎沸可仕、尊兄厚く御交りに候も先々御忍可被下候。數年の後一變も候は、い、可、悲、人、も、可、有、之、哉、極、秘、永、訣、如、此、候、頓、首、拜、具。

十月十日

華押

最 椿山老兄

末段に數年後の時勢を洞察した所は、流石に先見者たるに愧ぢず、之を以て聊か慰めて、安からぬうちに安じて逝かれたのであります。

期 盧生邯鄲夢圖は、自家の一生を諷して子孫に残さんが爲め、最後に描かれたと云ふとに傳はつてゐます。世間では大變傑作のやうに取沙汰してゐますが、此畫の原圖は唐土名勝圖繪にありまして、先生の創意ではなく、殆ど粉本其儘の者であります。又靜に見ますと、先生の作中決して傑作の部類に入る者ではありません。先生の次子小華の摸寫

もあるとですから、先生の筆ではありませうが、實際先生が最後の筆であつたか、又子孫に残される爲めに書かれたのだから、どうも疑問だと思ふのであります。單に人間一生の榮枯盛衰を一夢と觀じた戲餘の摸寫でもありませんか。此圖を傑作のやうに取沙汰するのは、甚だ見當違ひと思ひます。斷じて先生の心血を瀝いだものではありません。

邊 　　さで十月十日の夜決行されやうとしましたのですが、老母の眼を忍ぶことが出來ないので、心ならずも翌日になりました。

山 　　天保十二年十月十一日には先生は南坊流の宗匠奥田某を尋ねられまして茶を喫し、晝頃歸宅して午餐をすませられました。先生の居宅の横手に、機織り部屋がありますから、先生は一寸のぞかれて何氣ない體で、機織る下女に向ひ、「まだ織れてしまはないか」と云はれ、今度は居室の向側にある、もと大藏永常が砂糖を造つた所へ入はいられました。

最 　　先生の尊き血潮は此で流されたのであります。先生は先づ割腹され、それを白布で巻いて、衣服を正し、今度は返す刀で咽喉を突いて、見事に四十九年の生涯を畢られたのであります。當時用ひられた刃物は播磨の祐國作の短刀でありまして、文政十三年八月、播磨明石の大野夕鷗と云ふ人が先生に贈つたものであります。

期 　　老母は先生の在らぬを怪み、下女とともに、何心なく、此別屋に入られますと、こは如何に、先生は坐つた儘咽喉を貫いて打伏せに絶命されて居られます。老母はあつとばかり、魂を消しましたが、やゝあつて、とくと此様を見、其死様は何ちや、武士ともあらうものが、割腹もせで、女の眞似して咽喉突くとは」と、さめくと泣かれました。しかしよくく改めて見ますと、ちやんと腹一文字に割つさばいてあるのに、母は悲しいうちにも淋しく笑はれまして、「流石に我子であるわい」と云つて、又わ

つとばかり泣き伏されたと云ふことです。封建時代の武士の母に背かぬ心掛けであります。

先生自殺の事は江戸に急報せられ、藩侯から、幕府に届け出がありましたから、例の吟味役であつた中島嘉右衛門が検視役となつて、十一月田原に來ました。検視が済んで、其夜田原の南、城寶寺に葬りました。邊 諡號は文忠院華山伯登居士とつけました。

山 精勵勤勉で、しかも多事多難であつた先生の一生は、遑々たる間に畢りました。が、先生の夫人たか子が、先生歿後に於て年老いたる男優りの姑に善く事へ、まだいたいけの遺兒を養はれた心勞貞節に向つても讚辭を捧げなければなりません。老母榮女は、先生が亡くなられて後三年、弘化元年、七十三で死なれました。先生の長男立は、安政三年、二十五歳で若死されたので、次男諧は、椿山の門に入りて畫技を修め、小華と號

してゐましたが、渡邊家を相續しました。先生の罪科赦免のとは、藩侯から二度までも幕府に願ひ出ましたが、幕府は之を聽き届けませんでした。餘程重く見てゐたのであります。其の始めて許可となつたのは、明治元年のことで、先生の墓碑は、それでやつと建つことが出來ました。しかし先生が望まれた不忠不孝渡邊登の墓表ではなくて、小華が母たか子の墓と並べて普通の石碑を建設したのであります。明治二十四年四月三日、田原藩士は先生の碑を田原の城址に建て、朝廷よりは内帑金を賜はり、尋で正四位を贈られました。四十二年、華山會の創立成り、先生の舊宅の地池の原を保存し、此に碑を建て、永く先生自盡の地を残すことにしました。今田原の巴江文庫に多く先生の遺墨遺物を保存してゐますが、之を整理して残したのは、椿山の娘で、小華の夫人となつた須磨子の力であります。

先生が死なれた翌天保十三年七月に、文政八年に發布された外國船撃攘の令が廢されました。之はモリソン號に搭乘した漂民壽三郎なるものが澳門から寄せた書に本づいて、長崎奉行柳生久包ひさかほから幕府に上つた意見が行はれたからのもであります。天保十四年から弘化嘉永にかけて外國船の來航は愈々頻繁となりまして、遂に嘉永六年六月、米國水師提督ペルリの下田來船となりました。之から攘夷論が盛に行はれまして、幕府は對外策に忙殺されましたが、攘夷論は幕府を倒す一手段として用ひられましたので、事實は開國の方に進み行き、幕府は倒れて、我が邦は開國進取の國是を執ることになつたのであります。此に於て華山先生や高野長英等の先見の明は、立派に證據立てられることとなりました。唯世人及當局者が矇昧の間に、先生達の眼光は炬の如くありました。それ故に群小の擠す所となられたのであります。

先生は現世に不幸であられましたが、未來は永く幸福に生きてゐられます。先生の名は歳とともに高くなつて、遂に混まぶる時はありません。先生の志は是に於て始めて酬ひられたと云つてよろしい。

渡邊・華山終

大正十年一月二十日印刷
大正十年一月廿七日發行

定價金貳圓

不許
複製

著者

笹川種郎

發行者

愛知縣渥美郡教育會

印刷者

東京市牛込區榎町七番地
渡邊八太郎

印刷所

東京市牛込區榎町七番地
日清印刷株式會社

發賣所

美術書肆

合名會社

芸艸堂

(本店) 京都市寺町二條南入
(支店) 東京市本郷湯島一ノ一

394
25

終

